

西部開発事業（畠地帯総合土地改良事業）

—緊急発掘調査報告—

菖蒲沢・山の下遺跡

1980

伊那市教育委員会

西部開発事業（畠地帯総合土地改良事業）

—緊急発掘調査報告—

菖蒲沢・山の下遺跡

1980

伊那市教育委員会

序

我が伊那市の遺跡は全市にわたって分布しているが、特に西春近地区におけるその濃密度合は極だっている。今回発掘した、菖蒲沢遺跡、山の下遺跡は西春近南部諏訪形地籍にあり、その境は宮田村と隣接している。

二つの遺跡の成果を簡単にまとめてみると次のようになる。菖蒲沢遺跡では中世城郭址に由来すると思われる堀址、平安時代の住居址1軒、中世の住居址1、溝状遺構1、井戸址の発見がみられた。これらの遺構に伴なって出土した遺物を鑑定した結果、大部分が室町中期から室町後期の頃の遺物と判明した。これは西春近南部の中世で同地区を支配していた豪族の変遷を解明するうえに大きな鍵となり得るであろう事と思います。

山の下遺跡は縄文中期の住居址1軒、奈良時代の住居址5軒の発見をみた。

調査は昭和54年11月～12月にかけて行われ寒いなかでの発掘であったが、先に述べたような大きな成果を得ることができたのは誠によろこばしい次第であります。

最後に、調査報告書の発刊にあたって、南信土地改良事務所職員一同 調査団の諸先生、発掘作業員の皆様に真心より謝意を捧げます。

昭和55年3月4日

伊那市教育委員会

教育長 伊 沢 一 雄

まえがき（菖蒲沢・山の下遺跡の環境）

位 置

菖蒲沢遺跡は長野県伊那市西春近渕訪形の南部に、山の下遺跡は同じ様に西春近渕訪形の内でも北の方に位置している。

遺跡地に至るまでの道順は飯田線赤木駅で下車して、北へ向って50m程行くと左手に西春近農協南部支所の立看板が見える。この所を左に折れていくと、左岸の小高い面に西春近南小学校の真新しい校舎が見えてくる。この道を西へ向って、徒歩で10分程行くと、四つ角がある。右側には渕訪形の公民館が建っている。この四つ角を左手に行くと宮田に、右手にとれば西春近柳沢にそれぞれ行ける。四つ角を西へ向って5分程行くと右手に小高くなったところが見えてくるが、これが菖蒲沢遺跡である。この遺跡へ行かなくて、左手に折れていくと、法正寺、渕訪神社がある。

山の下遺跡は前に述べた渕訪形公民館のある四つ角を右に折れて5分程行くと、東側に西春近南小学校の校舎が鮮明に見えてくる。この附近で右に折れると学校へ行ける道がある。遺跡はこの道を左に折れて3分程歩くと、養蚕団地の建物のカラートタンが目に映る。この附近一帯が遺跡地である。

地形・地質

西春近の南部地区は犬田切川より南が該当するものと思われる。地形や地質の形成に最も重要な要因である河川を北から列記してみると次のようになる。犬田切川、猪ノ沢川、前沢川、大洞、藤沢川、堂沢川である。ここで考えておかなければならないのは菖蒲沢遺跡附近は大田切川の影響を受けている点である。各河川の特徴について詳細な点について上伊那郡誌「自然篇」によれば次のようである。『犬田切川は西春近権現山の南の谷を直線的に流れ、沢渡で天竜川に注いでいる。全長約6km、谷川で洪水に急速に出水して下流部は荒蕪がはなはだしい』。『藤沢川は宮田村オツ越附近の沢の湧水を集め、西春近下小出において天竜川に合流している。全長約6.8km、雨期には土砂の流出がはなはだしい』。『大田切川は木曾山脈駒ヶ岳（海拔2933m）の花崗岩地帯の雪渓に源を発し、千疊敷カールから湧き出る中御所谷の流れ、前岳の北側の北御所谷からの流れ、空木岳の北側の本谷からの流れのおのをお合わせて流れる。大田切川本流は $\frac{1}{2} \sim \frac{1}{5}$ の急公配で駒ヶ根市菅ノ台に至り黒川と合流、赤穂、宮田両地区的境界となり、天竜川に注ぐ。黒川は本岳の雪解け水をたたえる駒ヶ池、漫ヶ池から発し $\frac{1}{2} \sim \frac{1}{5}$ の急公配をもって森林地帯を流れる。大田切川は木曾山脈より発する最大の川で、最もその特徴を代表的にあらわしている川である』。遺跡地附近は標高700m前後であり、山麓扇状地状の地形を成していた。山麓扇状地のために山の押し出しが多く、遺跡地は砂層の堆積が多く、菖蒲沢遺跡は砂層の堆積が数えきれない程何層にもわたっていた。山の下遺跡は山の押し出しは少なく、ローム層まで30cm位であった。

猪ノ沢川は権現山麓の南の沢を蛇行状に流れ、沢渡区南丘部落の南側を流れ、天竜川に注いでいる。

る。全長約6km、普通は水量が少ないが、一度、雨が降り出すと、山麓地帯独特の荒れ川に変化するので、ところどころに砂防ダムがつくられている。

前沢川は物見や城附近山麓の北側にその源を発し、ほぼ直線的に柳沢部落の北側を流れ、同部落の東端で、藤沢川と合流する。その全長は約3kmである。川の状態としては上流では単純な川であるが、下流へ行くに従って解析が進み、藤沢川と合流する附近では深さ8~10mにも達している。

大洞は物見や城附近山麓の南側にその源を発し、ほぼ直線的に柳沢部落の南側を流れ、同部落の東端で、藤沢川と合流する。その全長は約3.5kmである。川の状態としては上流では単純な川であるが、下流へ行くに従って解析が進み、藤沢川と合流する附近では深さ10数mにも達している。

堂沢川は宮田村北割附近山麓の湧水を集め、諏訪形、赤木、下牧部落を流れ、天竜川と合流する。全長約7km、天竜川と合流する下牧附近ではかなり高い河岸段丘を形成している。

遺跡の名称

- | | |
|----------|--------|
| ①北丘B | ②北丘A |
| ③南丘B | ④南丘A |
| ⑤北丘C | ⑥南丘C |
| ⑦眼子田原 | ⑧山の神 |
| ⑨上の塚 | ⑩沢渡南原 |
| ⑪下小出平 | ⑫天伯 |
| ⑬下小出原 | ⑭天伯原 |
| ⑮東田 | ⑯南村 |
| ⑰井の久保 | ⑰表木原 |
| ⑲山の下 | ⑳高遠道 |
| ㉑西春近南小学校 | ㉒島井田 |
| ㉓菖蒲沢 | ㉔富士塙古墳 |
| ㉕富士山下 | ㉖広垣外I |
| ㉗広垣外II | ㉘宮入口 |
| ㉙和手 | ㉚上手南 |
| ㉛城の腰 | ㉜安岡城 |
| ㉝横吹 | ㉞寺村 |
| ㉞下牧経塚 | ㉟下牧 |



位置及び西春近中・南部地区遺跡分布図

第3節 歴史的環境

位置及び西春近中・南部遺跡分布図により①～⑨の各遺跡、古墳、経塚等々の時代別分類をしてみよう。北丘B遺跡は縄文早・中・後期。北丘A遺跡は縄文中期、奈良。北丘C遺跡は縄文中期。南丘B遺跡は縄文中期、奈良。南丘A遺跡は旧石器、縄文中期、弥生後期、奈良・平安。南丘C遺跡は縄文中期。眼子田原遺跡は縄文中期、奈良。山の神遺跡は縄文中期、奈良。上の塚は奈良、沢渡南原遺跡は縄文中期。下小出平遺跡は縄文中期、奈良。天伯原遺跡は縄文中期、奈良、平安。南村遺跡は縄文前・中期、東田遺跡は縄文中期、平安。天伯原遺跡は縄文中、後期。下小出原遺跡は縄文中期、奈良、平安。井の久保遺跡は縄文中、後期。表木原遺跡は縄文中期、奈良・平安。山の下遺跡は縄文中期、奈良。菖蒲沢は旧石器、縄文早・中・後・晚期、奈良。富士山下遺跡は縄文中期、弥生後期、奈良。富士塚は奈良、横穴式石室。広垣外1遺跡は縄文中期、奈良。広垣外2遺跡は奈良・平安。鳥井田遺跡縄文中期、奈良、平安。高遠道遺跡は縄文中期、奈良、平安。西春近南小学校附近遺跡は奈良、安岡城遺跡は縄文中期、奈良・平安・中世。城の腰遺跡は縄文中期、奈良・平安。横吹遺跡は縄文中期、奈良・平安。和手遺跡は縄文中期、奈良・平安・中世。上手南遺跡は奈良・平安。宮入口遺跡は縄文中期、奈良。寺村遺跡は縄文中期、奈良。下牧遺跡は縄文早・中期。下牧経塚は経塚遺跡である。以上述べてきた36遺跡のうちで発掘調査をしたものを事業別に列記してみると次のようになる。

中央道関係では北丘B遺跡、北丘A遺跡、南丘A遺跡、南丘C遺跡、菖蒲沢遺跡、富士山下遺跡、富士塚古墳である。

獲蚕団地事業としては、菖蒲沢遺跡である。土地改良事業としては眼子田原遺跡、南村遺跡、東田遺跡、今回の山の下遺跡、菖蒲沢遺跡である。

遺跡の分布の仕方は天竜川の右岸支流に沿ったところと、山麓面状地状の二つに大別できる。

北から犬田切川河岸段丘上には北丘B遺跡、北丘A遺跡、北丘C遺跡、眼子田原遺跡がある。猪の沢川河岸段丘上には南丘B遺跡、南丘A遺跡、南丘C遺跡がある。

前沢川河岸段丘上には下小出原遺跡、東田遺跡、天伯遺跡、藤沢川河岸段丘上には山の下遺跡、井の久保遺跡がある。

堂沢川河岸段丘上には上手南遺跡、宮入口遺跡、広垣外I遺跡、広垣外II遺跡、安岡城遺跡、城の腰遺跡、横吹遺跡、鳥井田遺跡がある。

天竜川右岸段丘上には山の神遺跡、上の塚遺跡、沢渡南原遺跡、表木原遺跡、寺村遺跡、下牧遺跡、下牧経塚遺跡がある。

菖蒲沢遺跡をとりまく中世の城館址としては柳沢の物見ヤ城、諏訪形の安岡城、表木の表木城、下牧の下牧城等々が確認されている。これらの城に関しての文献は篠田徳登氏の「伊那の古城」あるいは同氏の上伊那郡誌の歴史篇のなかに、古文書と筆者の踏査のもとに、調査した結果を詳細にのべてあるので参照されたし。ただ、若干の説明は菖蒲沢遺跡第IV章まとめの項に述べておきましたからあわせて参照して下さい。

(飯塚政美)

凡　　例

1. 今回の発掘調査は西部開発事業に伴う、土地改良事業で、第7次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。
2. この調査は、県営畠地帯総合土地改良事業に伴う緊急発掘で、国、県、市の補助金のもとに、事業は長野県南信土地改良事務所の委託により、伊那市教育委員会が実施した。
3. 本調査は、昭和54年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし文單記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。
4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

飯塚政美、友野良一

◎図版作製者

○遺構・遺物及び地形

友野良一、根津清志、小木曾清

○陶磁器・石器実測

根津清志・小木曾清

◎写真撮影

○発掘及び遺構・遺物

友野良一、根津清志、小木曾清、飯塚政美

5. 本報告書の編集は主として、伊那市教育委員会があたった。
6. 出土陶磁器の判別については、瀬戸市歴史民俗資料館長宮石宗広先生に御教示をいただいた。
7. 出土陶磁器は伊那市考古資料館に保管されている。

菖蒲沢遺跡

目 次

序

| | |
|------|-------|
| 目 次 | (1) |
| 挿図目次 | (2) |
| 表 目次 | (2) |
| 図版目次 | (2) |

| | |
|-------------|-----------|
| 第I章 発掘調査の経緯 | (3 ~ 5) |
|-------------|-----------|

| | |
|-------------|-----------|
| 第1節 発掘調査の経緯 | (3) |
| 第2節 調査の組織 | (3 ~ 4) |
| 第3節 発掘日誌 | (4 ~ 5) |

| | |
|----------|------------|
| 第II章 造 墓 | (6 ~ 14) |
|----------|------------|

| | |
|-------------|-------------|
| 第1節 住居址 | (6 ~ 9) |
| 第2節 城郭址及び掘址 | (9 ~ 13) |
| 第3節 潟状遺構 | (13) |
| 第4節 井戸址 | (13 ~ 14) |

| | |
|-----------|-------------|
| 第III章 造 物 | (15 ~ 20) |
|-----------|-------------|

| | |
|------------|-------------|
| 第1節 土器・陶磁器 | (15 ~ 19) |
| 第2節 石 器 | (18 ~ 19) |
| 第3節 金属器 | (19) |
| 第4節 古 銭 | (19 ~ 20) |

| | |
|----------|-------------|
| 第IV章 まとめ | (20 ~ 24) |
|----------|-------------|

挿図目次

| | |
|-----------------------|------|
| 第1図 地形・遺構配置・遺物分布図 | (付) |
| 第2図 第1号住居址実測図 | (6) |
| 第3図 第2号住居址・第1号溝状遺構実測図 | (7) |
| 第4図の1 烟址実測図 | (付) |
| タの2 堀址断面図 | (付) |
| 第5図 堀の入口附近実測図 | (11) |
| 第6図 第11号ベルト地層図 | (13) |
| 第7図 井戸址実測図 | (14) |
| 第8図 土器・陶磁器実測図 | (19) |
| 第9図 石器実測図 | (19) |
| 第10図 鉄器・古銭実測図 | (20) |

表目次

| | |
|-------------|---------|
| 第1表 出土遺物一覧表 | (15~18) |
|-------------|---------|

図版目次

| | |
|----------|------------|
| 図版1 遺跡遠景 | 図版8 遺物出土状況 |
| 図版2 遺構 | 図版9 出土陶磁器 |
| 図版3 遺構 | 図版10 出土陶磁器 |
| 図版4 遺構 | 図版11 出土陶磁器 |
| 図版5 遺構 | 図版12 出土陶磁器 |
| 図版6 遺構 | 図版13 出土陶磁器 |
| 図版7 遺構 | 図版14 出土陶磁器 |

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

西春近地区的西部開発事業（県営畑地帯総合土地改良事業）は昭和48年度の上島、東方部落、昭和49年度の東方、村岡、城、山本部落にわたって行われてきました。昭和51年度は沢渡の上段（根子田原）地区が該当しました。昭和52年度は南小出、宮の原、中村部落にかけて行われました。昭和53年度は柳沢地区と白沢、南小出地区が該当し、昭和54年度は諏訪形の菖蒲沢遺跡、山の下遺跡の2遺跡が該当しました。

発掘着手以前に南信土地改良事務所より委託する旨が伊那市教育委員会へ通知されました。市教育委員会では、その件について承諾しましたので、市教育委員会を中心に、菖蒲沢遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を行なうことにしました。

南信土地改良事務所長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。

第2節 調査の組織

菖蒲沢遺跡発掘調査会

調査委員会

| | | |
|-------|-------|----------------|
| 委員長 | 伊沢 一雄 | 伊那市教育委員会教育長 |
| 副委員長 | 福沢統一郎 | 伊那市文化財審議委員会委員長 |
| 委員 | 赤羽 映土 | 伊那市教育委員長 |
| ◆ | 向山 汗雄 | 南信土地改良事務所長 |
| 調査事務局 | 北村 忠直 | 伊那市教育委員会前教育次長 |
| ◆ | 三沢 昭吾 | ◆ 教育次長 |
| ◆ | 石倉 俊彦 | ◆ 社会教育課長 |
| ◆ | 有賀 武 | ◆ 課長補佐 |
| ◆ | 米山 博章 | ◆ 前係長 |
| ◆ | 武田 則昭 | ◆ 係長 |
| ◆ | 沖村喜久江 | ◆ ◆ 主事 |

発掘調査団

| | | |
|-----|-------|-----------|
| 団長 | 友野 良一 | 日本考古学協会会員 |
| 副団長 | 根津 清志 | 長野県考古学会会員 |
| ◆ | 御子柴泰正 | ◆ |
| 調査員 | 飯塚 政美 | ◆ |
| ◆ | 福沢 幸一 | ◆ |

第1章 発掘調査の経過

調査員 田畠辰雄 長野県考古学会会員
タ 小木曾清 宮田村考古学友の会会長
タ 春日徳明 大正大学学生

第3節 発掘日誌

昭和54年11月19日 考古資料館よりテントを含めた発掘器材を諏訪形の現場まで運搬する。テントは南北に長く、3張建て、南側の2つを休憩用に、その北側を道具小屋用にし、夕方までに建て終える。

昭和54年11月22日 グリットを設定する。南から北へA～D、東から西へ1～30として1辺を2m、1グリットを2m×2m、面積4m²と設定し、A1より1つ置きに掘り下げていく。

昭和54年11月24日 昨日に引き続いて掘り下げていくと、南西の一角に方形の落ち込みがみられ第1号住居址とする。一日中かかって、そのプラン確認につとめる。

昭和54年11月26日 第1号住居址のプラン確認とともに、それが終了次第、掘り下げを始める。住居址の中央部附近に西から東へ、ベルトを残して掘り下げていく。夕方までかかって、その完掘を終了する。なかから須恵器と土師器の出土をみた。プランは隅丸方形を成し、カマドはどうも破壊されてしまって現存しないと思われた。

昭和54年11月27日 住居址のほぼ完掘ができ次第、グリットを西へ決めて掘り下げていくと、東西に幅状に黒々と落ち込みがみられた。プランの確認を進めていくと、南側の竹林のなかに、掘り込まれた跡がみつかり一応堀址と断定できた。

昭和54年11月28日 堀址のプラン確認につとめて拡張を進めていく。

昭和54年11月29日 堀址のプラン確認につとめて拡張を進めていく。

昭和54年11月30日 堀址のプラン確認につとめて拡張を進めていく。

昭和54年12月1日 堀址のプラン確認につとめる。

昭和54年12月3日 堀址のプラン確認につとめる。

昭和54年12月4日 堀の掘り下げをセクションを残して開始する。掘り下げていくと、遺物の出土がしば



発掘風景

しばみられ、なかから古瀬戸系の陶磁器片の出土があった。セクションは南北に細長いのと、東西の二方面からとるようにした。南北に細長く残したセクションの下層面から砂層の堆積が厚くみられ、ひょっとすると、流し掘りの可能性も考えられた。

昭和54年12月5日 堀の掘り下げをしていくと、堀が一本は北側へ、もう一本は途中からカーブして西側へと屈折していた。堀の断面は西側ではU字状に、東側は薺研堀り状になっていた。

昭和54年12月6日 堀の掘り下げを続けていくと、なかから古瀬戸系の陶磁器片の出土をみた。堀を掘り下げていくと同時に堀の連がりを粗査してみるとどうも西側の方へ回っているようであった。

昭和54年12月7日 堀の掘り下げを続けていくと、なかから古瀬戸系の陶磁器片の出土をみた。

昭和54年12月8日 堀の掘り下げを続けていく。第1号住居址の清掃及び写真撮影をする。西側へ回っている堀のところどころにグリット掘りをし、そうした部分にセクションを残しておく。この作業を続けていると、西側の一部分で堀の切れた個所が発見され、どうも、この附近は出入口と思われた。

昭和54年12月9日 堀の掘り下げをつづけていく。第1号住居址の実測。堀の回っているなかの館と思われる所に規則的にグリットを入れる。グリットを入れてみると、南西の一角に方形状の落ち込みがみられ、これを第2号住居址とする。この遺構のすぐ南側に溝が発見され、第1号溝状遺構とする。出入口附近を拡張していくと、ピットが発見された。この出入口のすぐ南側に2カ所程円形の落ち込みがみられ、そのうちの北側のは井戸址、南側のは焼石を伴う遺構であったが、その性格を不明であった。

昭和54年12月10日 堀の断面実測、第1号住居址の実測、堀の掘り下げ、第2号住居址、溝状遺構、井戸址の掘り下げ

昭和54年12月11日 堀の断面実測、堀、2号址、溝状遺構、井戸址の掘り下げ

昭和54年12月14日 堀の掘り下げは東側部分では、ほぼ終了する。

昭和54年12月15日 堀の写真撮影を終了する。実測に入る。2号址、溝状遺構、井戸址、焼石を伴った遺構の掘り下げ終了、写真撮影終了、ただちに実測に入る。

昭和54年12月16日 堀、第2号住居址、溝状遺構、井戸址、焼石を伴った遺構の実測。

昭和54年12月17日 前日実測していた全ての遺構の実測を終了する。

昭和54年12月28日～昭和55年1月10日まであとの整理を行う。

昭和55年1月～2月 遺物の整理、図版の作製、報告書を印刷所へ送る。

昭和55年3月 報告書の刊行

(飯塚政美)

作業員名簿 池上大二・赤羽幸寿・唐木淳・酒井とし子・北原幸子・有賀鬼久雄・北原一喜・後藤重美・登内政光・井口はる子・大野田三千代・小池八重子・中村美さを・小田切房子・白鳥あき子・保科徳子・平沢八千子・酒井岩夫・三沢寛・西村清子・大久保富美子・酒井清・酒井貞子・酒井てる子・浦野和正・北沢武雄・木下進・保科兼雄・太田利男・酒井篤恵・百沢乙平・保科義重
(敬称略順不同)

第Ⅱ章 遺構

第1節 住居址

第1号住居址（第2図、図版2）

本址は堀の東側の位置に検出された。グリットで言うならばD25～D29まである。表土面より60cm位下った茶褐色土層面を掘り込んで構築してあり、隅丸方形プランを呈する竪穴住居址で、その規模は南北5m75cm、東西は5m5cm程を測定できる。

壁は北側は中段でやや内側にとび出し、南壁は北壁と同様である。東壁と西壁はやや外傾気味を呈している。壁高は北は30cm、南は15cm、東は28cm、西は37cmを測定できる。壁面には小さな砂の層がみられたが、砂層にしてはかたくなっており、良好であった。床面は砂層をかたくつきかためて構築してあり、大般水平となっていた。カマドは西壁の中央よりやや南側によったところに細縫が密集していたが、どうもカマドらしき跡があった。あとで、わかったことであるが、土師器や須恵器の破片から本址はカマ

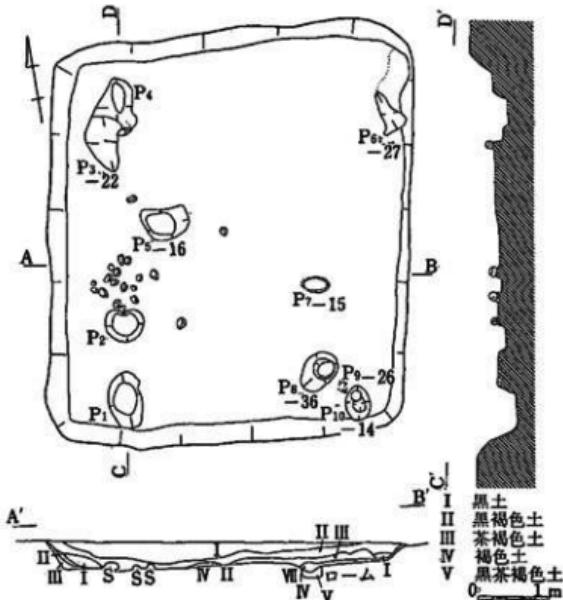
Dのあった時期の住居址と

判明した。したがって、これららの細縫はカマドと何んらかの関係あったものと断定できよう。ピットは10カ所検出されたが、主柱穴となりそうのはP₁、P₂、P₃、P₄、P₅等々であったが、配列状態はどうも不明確である。遺物は須恵器、土師器片がわずかに散片出土した。

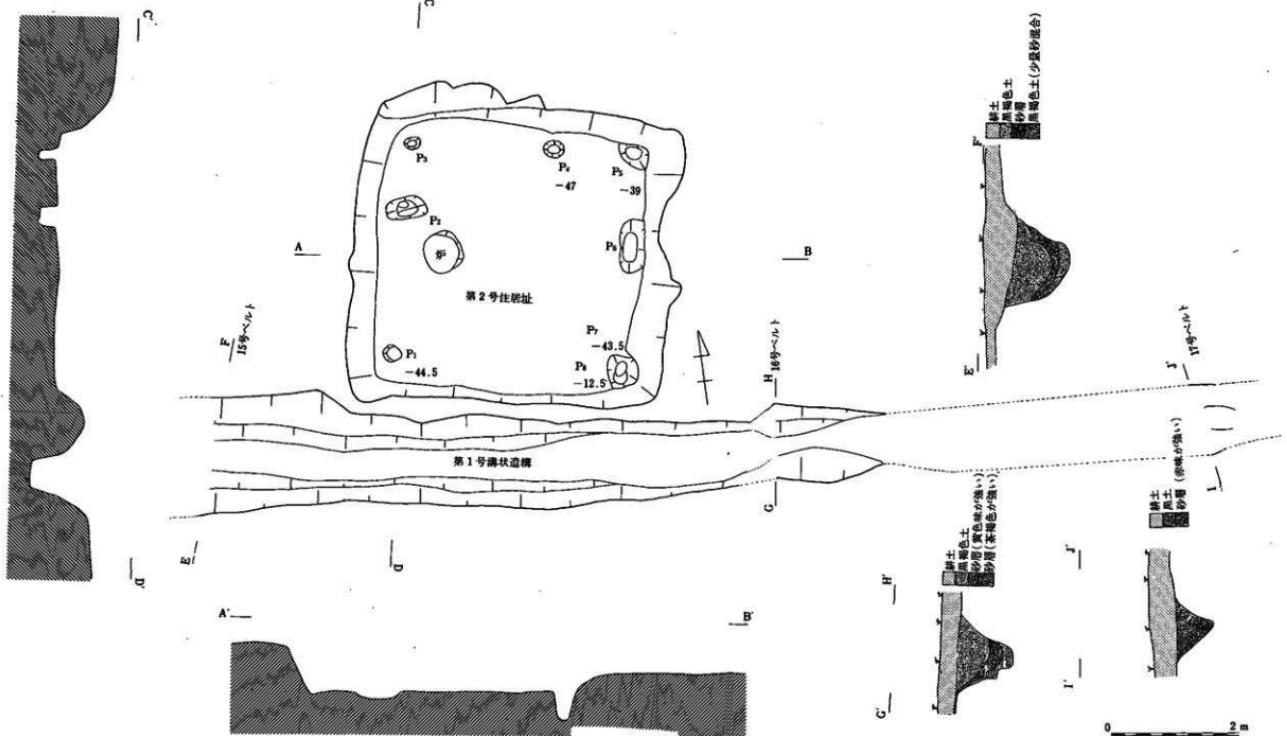
土師器はカキ目の発達の見事なもので、国分期に属していると思われる。したがって本址は平安時代の住居址と思われる。

第2号住居址（第3図、図版2）

本址は発掘地区的南西の沢近く、また堀の中郭の内



第2図 第1号住居址実測図



第3図 第2号住居址・第1号溝状追跡実測図

に検出された。表土面より60cm位下った砂混合の茶褐色土層面を掘り込んで構築した竪穴住居址である。平面プランはところどころで、デコボコはあるが全体的には隅丸方形形状を呈している。その規模は南北4m62cm、東西4m70cmを計る。

壁は外傾気味、南は外傾気味で、ところどころでデコボコがあり、東側は外傾気味、西側も外壁気味を呈していた。全般的に壁面の凹凸は少なかった。壁高は掘り込み面が北西から南東の傾斜のために、西、北が高くなっている。壁の高さは北80cm、南45cm、西78cm、東25cmを測る。

床面は砂混合の茶褐色土層面中に構築してあり、かたいタタキになっており、わずかなデコボコはみられたが、全般的には水平であった。炉は住居址の中央よりやや西側によつたところに、南北60cm、東西55cmの範囲で焼土が検出された。焼土の堆積は割に厚かった。ピットは全部で8ヵ所発見され、全て主柱穴となり得そうである。柱穴のなかでもP₁のように角状のものもみられた。角状のピットは中世以降に見られるものであろう。

遺物は室町中期古瀬戸灰釉平茶碗、室町中期古瀬戸天目茶碗、室町後期古瀬戸鉄釉壺の破片が出土している。したがって本址は室町後期の遺構と思われる。

第2節 城郭址及び堀址（第4～6図、図版3～6）

この地区的城郭址は、今回の発掘調査が実施されるまであることすら確認されていなかった。ただ、この近くに、堀・町屋という小字名が存在していることから、城郭址の往時をしのばせてくれる。

本郭址の全体的な規模は、全面発掘を実施しなければ、その正確なる数値は不明であるが、今までの城郭址の通例、あるいは一般的な考え方からして、その論を進めていきたいと思う。

推測するに、外郭と内郭の両郭部より成立していることと思われる。これらの両郭部のある地の自然的条件としては、南側に堂沢川上流の沢が、西から東へ流れ、その氾濫湿地帯を成し、一大水田農耕地帯を形成している。この湿地帯は南の大田切川の影響している北限の地である。微地形的にみてみると、当地は北から南へわざかな傾斜を持つ。河岸段丘状地形、丘陵地状地形、山麓丘状地状地形の三者の異なる地形が一つに重なっている。

外郭の範囲は南は、堂沢川湿地帯、東は堂沢川の支流で北から南へ流れる無名の小河川（現在、この附近は竹林が茂っている）、北側は桑畠へ（現在、先に述べた小河川と接する附近に堀状の凹み部分を発見）、西側は今度検出された堀址で、それぞれその四限界を成していると思われる。以上、述べてきたことからして、東西55m程、南北50m程、標高666m～672m位の範囲に含まれ、したがって、比高は6mを測定できる。外郭の西側と思われる地区を今回発掘調査を実施したが、本城郭に關係する遺物の出土は何もなかった。

内郭の範囲は、南は堂沢川上流の沢、東は今回の発掘によって発見された堀址、北は東と同様な堀址、西側は南側と同様に堂沢川上流の沢と、それぞれ四界を成している。内郭の規模は外郭と異って、四界が明確であったので、その規模も正確に測定できる。東西75m程、南北70m程、標高672m～678m位の範囲に含まれ、したがって比高6mを測定できる。比高は外郭部は割合に急であったのに、内郭部は大般平坦であった。

第Ⅱ章 遺構

今回の発掘で、発見された堀址は、いわば内堀と呼ばれるものであると思われる。その広がり範囲は、内郭の東側境界線に沿って、南から北へ105m程行くと、西へゆるやかなカーブを描いて続く、この曲折部より西へ55m程行くと、堀の切れた個所が発見される。この附近が入口部分である。それから西へと続き、沢へと抜け出している。南の沢と接する南と、西側の一部分は段丘崖へと抜け出しており、崖面に凹みが顕著に認められた。

堀址の最も幅の広い部分は6m50cm程、最もその狭い部分では2m50~60cm程を、深さは深いところでは4m前後、浅いところでは1m20~30cm前後を測定できる。南側の段丘崖へ接する部分から北へ37m程行くと、堀址は二又状に別れており、西側の堀址はそのまま北へ20m程続き、この部分で西へ曲がり、6m程行くと、結末となっている。この結末部分は、若干カーブ状を描く、堀址の上面は外少の凹凸は認められるが、大般平坦であった。堀底は南も西も、段丘崖へ向けてわずかながら傾斜をしていた。つまり、段丘崖と接する部分は堀址のなかでは最も幅が広く、最も深くなっていた。

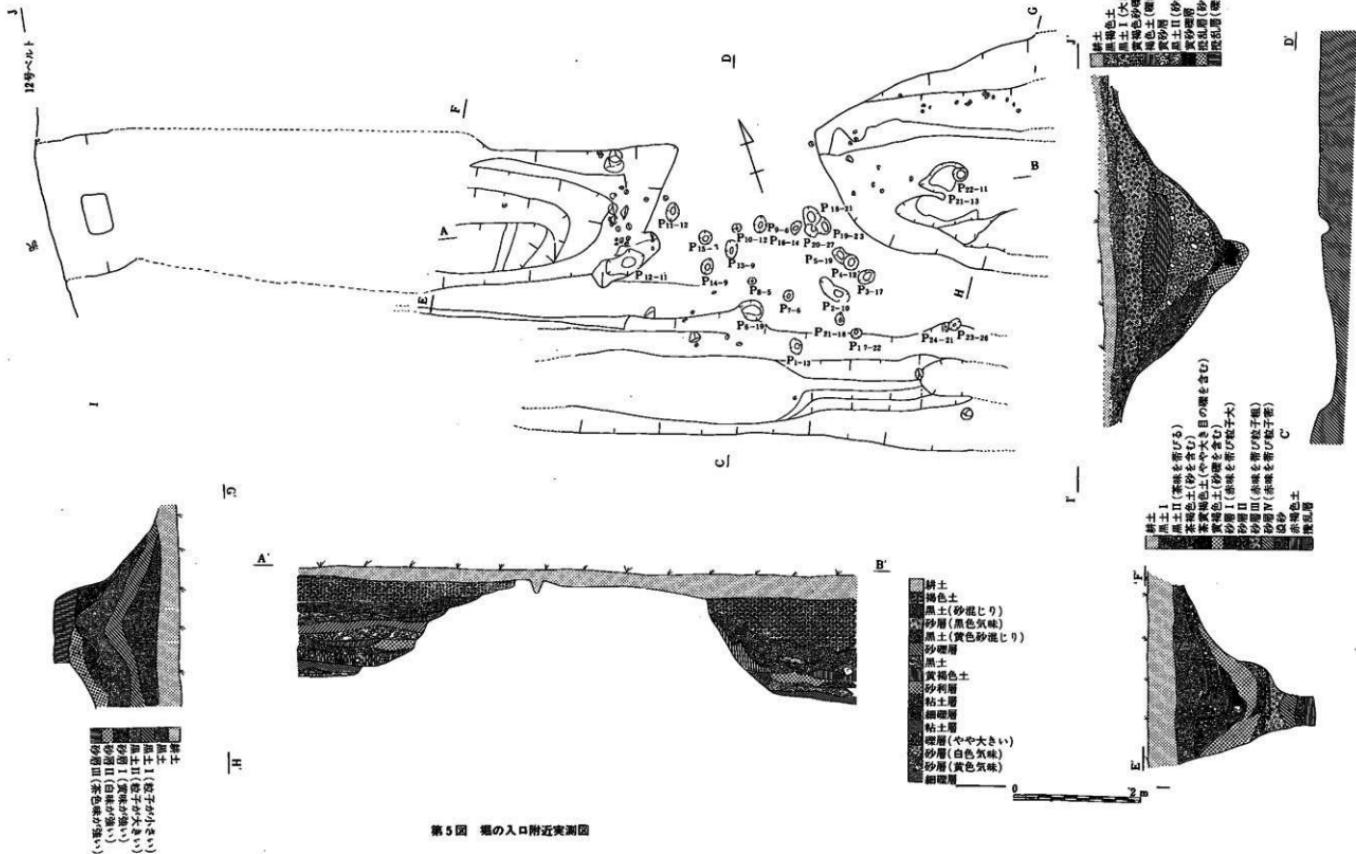
堀址のなかへ埋っていた土層は何層にもわたっていた。セクションをとったなかで、東西断面をいわゆる自然流入の堆積の仕方をとっている様相を呈しているのに反し、南北にJ15~R15にわたってはバンド状に砂層類の地積が多く、何層にも及んでいるのがみられた。この傾向はもう、グリットが1つづれただけで、層位が異なるというように複雑多岐にわたっていた。このことは、いわゆるまず自然堆積とは思われない。おそらく、堀址の粗型をつくる時に、南側の沢の上流をせき止めて、水を北へ廻し、この部分に水を入れて、南側の沢へ公配を利用して落したものと思われる。つまり、流し堀りにした時に堆積した砂層の一部分かと思われる。

堀址のなかにみられる石は、底面よりかなり浮いた面に検出され、その大きさは、こぶし大から一抱え大程の河原石で、部分的ではあるが二段になったところも認められた。このような状態は検出されたレベルより人為的に投げこまれたように思われる。

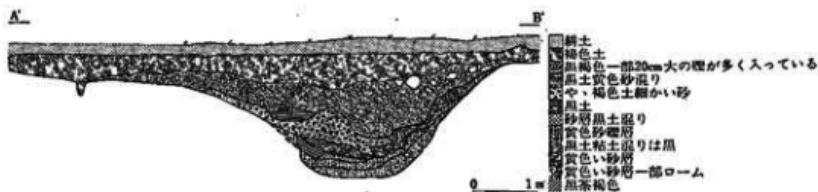
入口は城郭址の西側の方に位置して発見された。この一角では今まで続いてきた堀址が一部分だけ切れている。切れた部分の端末は若干カーブ状を描いている。この部分は南北3m、東西2m20cm程の規模を測定できる。南側によったところに多数のビット列がみられたが、このなかには門柱となるのも当然含まれているものと思われる。

遺物は鎌倉期から江戸期までの各時期に亘っていたが、江戸期のものは後世の飛び込みの可能性が強い。堀址内の出土遺物には時代的な層位差は認められず、内郭部からの流入も頭に入れて考えてみる必要が生じてくるであろうと思われる。

（飯塚政美）



第5図 堀の入口附近実測図



第6図 第11号ベルト地層図

第3節 溝状遺構

第1号溝状遺構（第3図、図版2）

本遺構は第2号住居址の南側に近接して発見された遺構である。砂混合の茶褐色土面を東西に掘り込んで構築してある。その規模は東西は全面発掘をしてないので不明、南北の広いところでは1m80cm、狭いところでは78cmを測る。平面プランはところどころで、わずかな出張りを見るが、全般的には長方形状になっている。断面はU字形状を呈する。

壁は北壁は垂直気味、南壁は外傾気味で、壁面は平坦でかたくなっていた。壁高は北では75cm、南では90cmを測る。床面は砂混合の茶褐色土層中に構築され、平坦で、かたくなっていた。

遺物は何も出土しなかったが、中世の城郭に伴う遺構かと思われる。

第4節 井戸址（第7図、図版7）

本図の平面のなかに一点破線の部分がみられるが、これは井戸址を全面的に発掘すると崩落して人命に危険が生じやすかったので、この部分は発掘しないで、破綻の部分を東西南北に十文字状に一部分を発掘して壁を面出して調査した。検出された地区は掘の入口のすぐ南側であった。

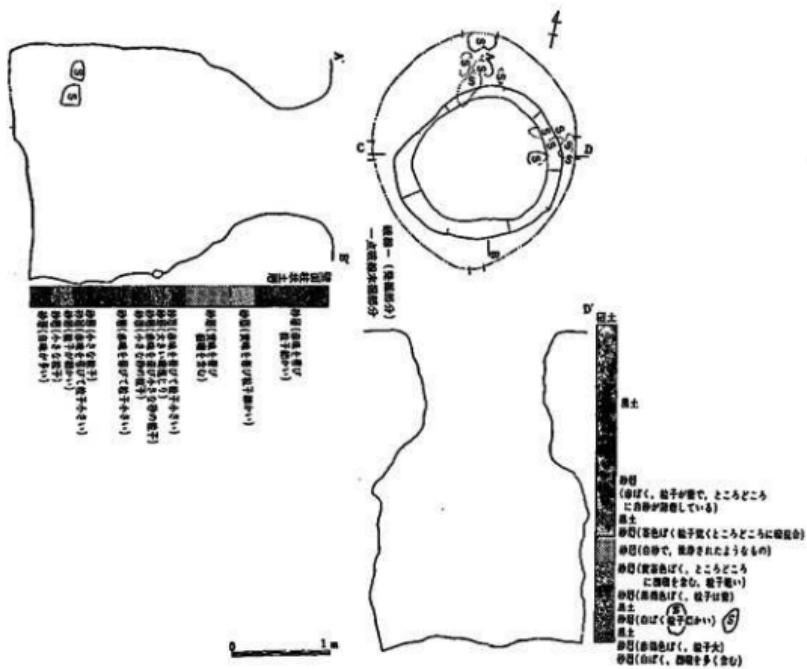
壁面の柱状土層は井戸址附近の地層を調査するため、また覆土は井戸址の埋没状態を表わすものである。本井戸址は掘の入口のすぐ南側に位置して発見され、表土より50cm位下がった砂混合の茶褐色土層面を掘り込んで構築してある。そのプランは不整円形状を成し、上面の規模は南北は1m50cm、東西は1m70cm、底面の規模は南北2m35cm、東西2m5cmを、深さは3m10cm程度を測定できる。

断面をみると上部の80cm位は円筒形を成し、その覆土は黒土、中部は45cm位の幅で外へ若干出張り気味である。その覆土は上部は黒土、下部は砂層で充満していた。下部は2m6cm前後で段状になっていた。その覆土は黒土、砂層4枚、黒土2枚、砂層2枚が複雑な堆積をしていた。

床面は凹凸が顕著であった。床面より50~60cm位上がった面に人頭大から一抱え程もある河原石を円形状に壁面に沿って配列してあった。この配列石は水を遮ませるものに入れたのであろう。

遺物は何も出土しなかった。だが、城郭のなかにあるから中世の井戸址には間違いないと思われる。覆土は12層（内訳黒土4層、砂層8層）、壁面柱状図は13枚の砂層より成り立っていた。柱状図より附近の地層は何回にもよる山麓の押し出しによる砂層によって形成されていることが判明した。

（飯塚政美）



第7図 井戸址実測図

第Ⅲ章 遺物

第1節 土器・陶磁器

今回の調査で出土した土器、陶磁器は、約100点で、数点を除いて他は断欠品である。種別をみると、古瀬戸系46%、瀬戸系5%、土師器系9%、須恵器系10%、内耳系20%、中国青磁5%、唐津系4%、織部系1%であり、古瀬戸、瀬戸系が全体の約5割を越す量をしめている。

時代的にみると、奈良時代7%、平安時代8%、鎌倉前期1%、鎌倉後期2%、南北朝1%、室町前～中期1%、室町中期30%、室町後期15%、室町後期末葉2%、室町時代2%、安土桃山1%、江戸初期2%、江戸期5%、時代不詳23%である。器型から日常食器類（雜器類）、仏具類、茶器類、貯蔵用、祭祀器の類等々、日常生活にかくことのできない品々であった。その他の説明については、下の第1表出土遺物一覧表を図版9～14と照合して下さい。台帳番号は後の袋中に入っている第1図に記載されている番号、番号は図版9～14なかで写真の右下に記してある番号である。

第1表 出土遺物一覧表

| 台帳番号 | 図版番号 | 名称 | 器型 | 部分 | 厚さ (mm) | 出土場所 | | 製作時代 | 実測図 | 備考 |
|------|------|---------------|-----------|------|------------|---------|---------|--------|-----|----|
| | | | | | | グリット | 標高 m | | | |
| 1 | | 土師器 | 胴部 | 8 | R-15 | 670.805 | 奈良時代 | | | |
| 2 | | 打製石斧 | | | R-16 | 670.965 | 绳文時代 | | | |
| 3 | 9 | 1古瀬戸鉄釉大甕 | 胴部(9～11) | タ | 670.86 | 桃山時代 | | | | |
| 4 | 9 | 2古瀬戸灰釉平茶碗 | 胴部(4～11) | タ | 670.86 | 室町後期 | | | | |
| 5 | 9 | 3内耳鍋 | 胴部 | 7 | タ | 671.51 | 奈良時代 | | | |
| 6 | 9 | 内耳鍋 | | タ | (11～13) | Q-15 | 670.70 | | | |
| 7 | 9 | 4古瀬戸鉄釉スリ鉢 | 口縁部(5～6) | O-15 | 670.79 | 室町後期 | | | | |
| 8 | 14 | 43中國青磁 | 胴部(6～13) | I-17 | 671.08 | 南北朝 | | | | |
| 9 | 9 | 5古瀬戸灰釉四耳壺 | 胴部 | 10 | タ | 671.125 | 室町中期 | | | |
| 10 | 9 | 6古瀬戸鉄釉祖母娘壺 | 口縁部(9～12) | タ | 671.18 | 室町前～中期 | | | | |
| 11 | 9 | 7古瀬戸灰釉仏花器(草瓶) | 胴部 | 8 | F-16 | 680.835 | 室町中期 | | | |
| 12 | 9 | 8古瀬戸灰釉四耳壺 | 胴部 | 10 | E-16 | 671.06 | タ | | | |
| 13 | 10 | 9須恵器 | 底部(3～5) | C-17 | 670.79 | 11世紀後半 | | | | |
| 14 | | 石臼(安山岩) | | | C-16 | 670.00 | | 9図 | | |
| 15 | 10 | 10須恵器 | 胴部 | 11 | タ | 669.97 | 11世紀後半 | | | |
| 16 | | 内耳鍋 | 底部(7～9) | B-16 | 670.24 | | | | | |
| 17 | | 内耳鍋 | 胴部 | 7 | A-15 | 670.84 | | 8図の1接合 | | |
| 18 | 10 | 11瀬戸鉄釉香炉 | 口縁部 | 5 | P-16 | 671.21 | 江戸期 | | | |
| 19 | 10 | 12須恵器 | 胴部(7～9) | L-15 | 670.51 | 11世紀後半 | | | | |

第Ⅴ章 造 物

| 台 帳 番 号 | 図 番 版 号 | 名 称 | 器 型 | 部 分 | 厚 さ (mm) | 出 土 地 場 所 | | 製 作 時 代 | 実 測 図 | 備 考 |
|------------------|--------------------|----------|-----|-----------|-------------|------------|------------|------------------------|-------|-----|
| | | | | | | グ リ ッ ト | 標 高 (m) | | | |
| 20 | 1013 | 磨津湯呑 | | 銅 部(7~8) | I-17 | 670.98 | 江戸期 | | | |
| 21 | 1014 | 古瀬戸戸器型不明 | | 底 部(4~10) | タ | 670.715 | 室町期 | | | |
| 22 | | 鉄鑓 | | | D-16 | 670.24 | 古墳時代 | 10図の 1 | | |
| 23 | 1015 | 古瀬戸灰釉皿 | | 底 部(4~6) | C-16 | 670.005 | 室町中期 | 8図の 2 | | |
| 24 | | 内耳鍋 | | 口縁部(6~8) | B-16 | 669.15 | | | | |
| 25 | 1016 | 古瀬戸天目茶碗 | | 口縁部(3~5) | タ | 670.02 | 室町後期 | | | |
| 26 | 1117 | 古瀬戸鉄釉スリ鉢 | | 銅 部(6~8) | タ | 670.34 | タ | | | |
| 27 | 1118 | 古瀬戸灰釉オシ皿 | | 底 部(4~7) | A-16 | 670.03 | 室町中期 | 8図の 3 | | |
| 28 | | 錐状石器 | | | | タ | 669.72 | 鈍文 | | |
| 29 | 1119 | 古瀬戸天目茶碗 | | 口縁部 | 3 | タ | 669.475 | 室町後期 | | |
| 30 | | 内耳鍋 | | 銅 部 | 6 | タ | 670.05 | | | |
| 31 | | 内耳鍋 | | 底 部(5~6) | タ | 669.77 | | | | |
| 32 | 1120 | 古瀬戸灰釉平茶碗 | | 口縁部(3~7) | B-16 | 670.52 | 室町中期 | | | |
| 33 | 1121 | 古瀬戸鉄釉スリ鉢 | | 銅 部(6~7) | B-15 | 670.23 | 室町後期 | | | |
| 34 | 1448 | 内耳鍋 | | 底 部(6~8) | タ | 670.02 | | | | |
| 35 | 1122 | 古瀬戸灰釉平茶碗 | | 口縁部(2~7) | タ | 669.73 | 室町後期~末葉 | 8図の 4 | | |
| 36 | 1124 ²³ | 古瀬戸灰釉皿 | | タ(4~6) | A-15 | 669.19 | タ | 8図の 5 | | |
| 37 | | 内耳鍋 | | 銅 部(5~6) | B-15 | 669.35 | | | | |
| 38 | | 古瀬戸灰釉四耳壺 | | 銅 部 | 10 | H-15 | 670.885 | 室町中期 | | |
| 39 | | 石 器 | | | | G-16 | 670.59 | 鈍文 | | |
| 40 | | 石 器 | | | | G-16 | 671.635 | タ | | |
| 41 | | 須恵器 | | 銅 部(7~10) | 1号住 | 670.49 | 平安時代 | | | |
| 42 | | 須恵器 | | 銅 部(7~10) | タ | 670.125 | タ | | | |
| 43 | | 須恵器 | | 銅 部(7~10) | タ | 670.115 | タ | | | |
| 44 | | 古瀬戸スリ鉢 | | 底 部(4~10) | A-17 | 670.98 | 室町中期 | | | |
| 44 | | 中国青磁香炉 | | 銅 部(3~4) | タ | 670.98 | 室町期 | | | |
| 45 | | 内耳鍋 | | 銅 部(6~8) | A-16 | 670.04 | | | | |
| 46 | | 瀬戸系山茶碗 | | 銅 部(3~5) | タ | 670.12 | 鎌倉前期 | | | |
| 47 | | 内耳鍋 | | 銅 部 | 7 | タ | 670.02 | | | |
| 48 | | 古瀬戸鉄釉堺 | | 底 部(9~15) | J-18 | 670.81 | 室町中期 | | | |
| 49 | | 古瀬戸灰釉四耳壺 | | 銅 部(9~10) | K-18 | 671.40 | 室町中期 | | | |
| 49 | | 古瀬戸灰釉大鉢 | | 銅 部(6~9) | タ | 671.40 | タ | | | |
| 50 | | 内耳鍋 | | 底 部 | 4 | タ | 671.35 | | | |
| 51 | | 内耳鍋 | | 口縁部(5~8) | タ | 670.71 | | 8図の 1接合17.52. 64.75 | | |
| 52 | | 内耳鍋 | | 銅 部 | 7 | タ | 671.57 | 8図の 1接合 | | |

| 台帳番号 | 図版番号 | 名称 器型 | 部分 | 厚さ (mm) | 出土場所 | | 製作時代 | 実測図 | 備考 |
|------|--------------------|----------|------------|------------|--------|---------|--------|--------|----|
| | | | | | グリット | 標高 m | | | |
| 53 | | 古瀬戸灰釉薄瓶 | 底 部 | 5 | L-19 | 672.06 | 鎌倉後期 | | |
| | | 縁部系 | 胴 部 | 2 | タ | 672.06 | 江戸期 | | |
| 54 | | 古瀬戸灰釉平茶碗 | 底 部(6~7) | N-19 | 671.48 | 室町中期 | | | |
| 54 | | 古瀬戸灰釉木差し | 口縁部(6~7) | タ | 671.48 | 室町後期 | | | |
| 55 | | 土師器 | 胴 部(4~8) | L-15 | 671.09 | | | | |
| 56 | | 土師器 | 胴 部(7~8) | S-16 | 671.31 | | | | |
| 57 | | 古瀬戸灰釉鉢 | 口縁部(3~5) | S-17 | 671.94 | 室町後期 | | | |
| 58 | | 古瀬戸灰釉平茶碗 | 胴 部(4~8) | V-17 | 671.63 | タ | | | |
| 59 | | 古瀬戸灰釉平茶碗 | 口縁部(2~6) | R-19 | 672.34 | タ | | | |
| 60 | | 古瀬戸灰釉スリ鉢 | 胴 部(5~8) | C-16 | 670.60 | タ | | | |
| 61 | | 古瀬戸灰釉スリ鉢 | 口縁部(7~10) | タ | 670.04 | タ | | | |
| 62 | | 古瀬戸灰釉平茶碗 | 口縁部(3~5) | B-16 | 669.57 | 室町中期 | | | |
| 63 | | 内耳鍋 | 底 部(7~9) | C-16 | 669.45 | | | | |
| 64 | | 内耳鍋 | 底 部(7~9) | K-18 | 670.89 | | 8図の1接合 | | |
| 65 | | 須恵器 | 胴 部(8~9) | N-18 | 671.16 | | | | |
| 65 | | 内耳鍋 | 口縁部(6~8) | タ | 671.16 | | | | |
| 66 | | 須恵器 | 胴 部 6 | O-17 | 671.16 | | | | |
| | | 土師器 | 胴 部 6 | タ | 671.16 | | | | |
| 67 | | 成元元宝 | | H-16 | 669.23 | 北宋 | 10図の2 | | |
| 68 | | 古瀬戸灰釉四耳壺 | 胴 部(10~12) | N-17 | 670.86 | 室町中期 | | | |
| 68 | | 古瀬戸灰釉大鉢 | 底 部(6~7) | タ | 670.86 | タ | | | |
| 69 | | 砥石 | | J-17 | 670.29 | | | | |
| 69 | | 内耳鍋 | 底 部(10~15) | タ | 670.29 | | | | |
| 70 | | 古瀬戸灰釉大鉢 | 胴 部(4~7) | I-15 | 670.79 | 室町中期 | | | |
| 71 | | 内耳鍋 | 胴 部(7~8) | I-16 | 669.78 | | | | |
| 72 | 1225 | 古瀬戸灰釉スリ鉢 | 胴 部(5~7) | C-16 | 668.89 | 室町中期 | | | |
| 73 | 1229 | 須恵器 | 胴 部 8 | Q-18 | 671.46 | | | | |
| 74 | | 内耳鍋 | (7~9) | C-16 | 668.92 | | | | |
| 75 | | 内耳鍋 | | 7 | I-15 | 669.74 | | 8図の1接合 | |
| 76 | 1226 ²⁷ | 中国青磁碗 | 底 部(5~13) | G-33 | 674.36 | 室町中期 | 8図の6 | | |
| 77 | 1228 | 古瀬戸鉄釉亞 | 胴 部 9 | 2号住 | 674.52 | 室町後期 | | | |
| 78 | | 古瀬戸灰釉平茶碗 | 口縁部(5~7) | タ | 674.57 | 室町中期 | | | |
| タ | 1230 | 古瀬戸天目茶碗 | 底 部(6~9) | タ | 674.57 | タ | | | |
| タ | 1231 | 古瀬戸灰釉平茶碗 | 底 部(6~8) | タ | 674.57 | タ | | | |
| タ | 1232 | 古瀬戸灰釉平茶碗 | 口縁部(5~6) | タ | 674.57 | タ | | | |

第Ⅲ章 遺 墓 物

| 台 帳 番 号 | 図 番 号 | 名 称 | 器 型 | 部 分 | 厚 さ (mm) | 出 土 場 所 | | 製作時代 | 実測図 | 備 考 |
|------------------|-------------|-----------|-----------|------|----------------|----------|-----------|------|-----|-----|
| | | | | | | グリッ ト | 標 高 mm | | | |
| 78 | 1333 | 古瀬戸灰釉平茶碗 | 口縁部(5~6) | 2号住 | 674.57 | 室町中期 | | | | |
| タ | 1334 | 古瀬戸灰釉平茶碗 | 底 部 | 6 | タ | 674.57 | タ | | | |
| 79 | 1335 | 古瀬戸大形祖母娘壺 | 胴 部(7~12) | | | 676.06 | タ | | | |
| 80 | 1336 | 古瀬戸天目茶碗 | 口縁部(3~7) | 2号住 | 674.27 | 室町中期後葉 | 8図の7 | | | |
| 81 | | 古瀬戸天目茶碗 | 胴 部 | 5 | G-34 | 674.30 | タ | | | |
| 82 | | 須恵器 | 口縁部(7~9) | E-33 | | 674.11 | | | | |
| 83 | | 古瀬戸天目茶碗 | 口縁部(2~6) | K-20 | 耕土中-20 | 室町中期 | | | | |
| 搬出入口 1 2 | | 土師器 | | 8 | Y-5 | 676.72 | | | | |
| | | 鉄片 | | | Z-51 | 676.77 | | | | |
| 3 | 1447 | 瀬戸灰釉灯明皿 | 底 部 | 3 | Y-51 | 677.06 | 江戸初頭 | | | |
| 4 | | 土師 | 胴 部 | 8 | X-49 | 676.40 | | | | |
| 84 | 1337 | 古瀬戸天目茶碗 | 底 部(5~8) | 2号住 | 1層 | 室町中期 | | | | |
| 85 | 1338 | 唐津系 | 口縁部(2~4) | タ | タ | 江戸期 | | | | |
| 86 | 1339 | 中国青磁碗 | 胴 部(5~8) | タ | タ | | | | | |
| 87 | 1340 | 古瀬戸天目茶碗 | 胴 部 | 7 | タ | タ | 室町中期 | | | |
| 88 | 1441 | 古瀬戸灰釉四耳壺 | 胴 部(8~13) | 堀 | 2号ベルト | 鎌倉後期 | | | | |
| 89 | 1442 | 瀬戸天目茶碗 | 底 部(5~6) | E-15 | 耕土中 | 江戸初頭 | | | | |
| 90 | 1444 | 唐津物 | 胴 部(3~5) | P-16 | タ | 江戸初頭 | | | | |
| 91 | 1445 | 古瀬戸大型盤 | 底 部(5~10) | E-16 | タ | 室町中期 | | | | |
| 92 | 1446 | 古瀬戸天目茶碗 | 口縁部(5~6) | 井戸址西 | タ | 室町中期 | | | | |

第8図の(1)は堀内から出土の内耳土器である。第1表によりNo51, 52, 17, 64, 75の接合により復元された。口縁径28.9cm, 底部径は21.8cm, 高さ17.1cmを測る。(2)は室町中期の古瀬戸灰釉皿の底部破片であり糸切り底を成している。第1表のNo23である。

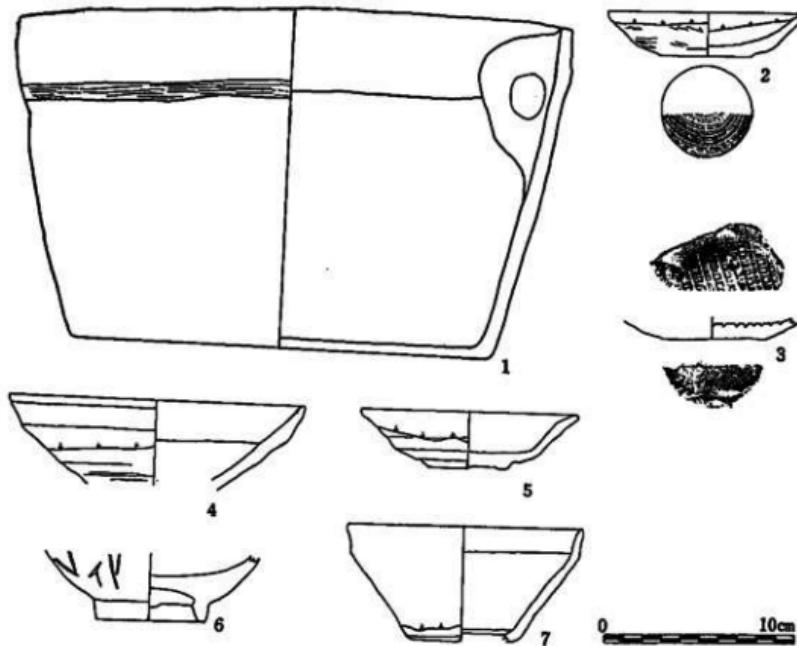
(3)は室町中期の古瀬戸灰釉オロシ皿の底部破片で、糸切り底を成している。第1表のNo27である。(4)は室町後期末葉の古瀬戸灰釉平茶碗の口縁部破片で、底部は欠損している。第1表No35である。

(5)は室町後期末葉の古瀬戸灰釉皿の完型品である。第1表No36である。(6)は室町中期(南宋)の中国青磁碗で、外面に蓮弁文を印刻してある。第1表No76である。(7)は室町中期後葉の古瀬戸天目茶碗である。第1表のNo80である。

(2~5)は堀址内出土、(6)は第2号住居址近くより出土、(7)は第2号住居址の覆土内出土である。

第2節 石器(第9図)

本遺跡は堀址内より出土、第1表No14の石臼である。石質は安山岩製で中央がわずかに凹み、



第8図 土器・陶磁器実測図

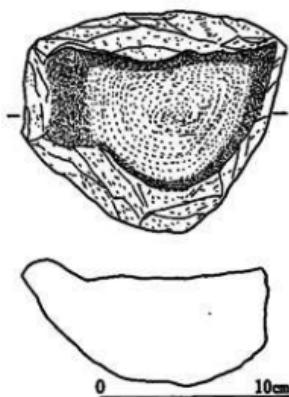
磨った跡がみられる。中世の石臼と思われる。

第3節 金属器（第10図）

第10図の1は平根の鉄鎌である。長さは5.2cm、中基は2.3cmを測る。断面は扁平気味を呈し、腐植度合は少ない。近くに存在している古墳の遺物であろう。何かのことで、古墳が破壊され、掘址にとびこんだのであろう。第1表のNo22である。

第4節 古銭（第10図）

本古銭は掘址の底部近くの面より出土した成平元宝である。これは中国の北宋時代（998年）に鋳造されている。日本への輸入は平清盛の日宋貿易、足利義満の勘合貿易によるところが極めて大である。



第9図 石器実測図

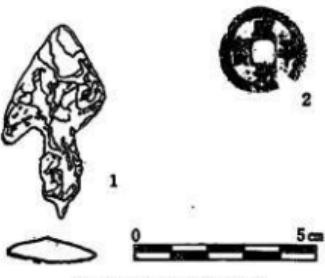
第Ⅳ章 まとめ

字の状態は良好であり、銀青によってやや磨耗していた。

第1表のNo67である。上伊那においてはこの種の古銭出土は極めてまれである。

今後の我郡内における貨幣史の一頁を飾るのに好資料となる。

(飯塚政美)



第10図 鉄錢・古銭実測図

第Ⅳ章 まとめ

菖蒲沢遺跡は昭和54年度、諏訪形土地改良事業地区内に該当するとのことで、工事実施以前に発掘調査を行ったわけであるが、当初、全く予期もしていなかった城館址が発見され、まとめには歴史的背景に基づいた上で、論を進めていきたいと思う。

(1) 地形的景観について

当遺跡地の西は山麓扇状地が開け、南東は段丘状になり、その下部には低湿地帯が開け、一大設倉地帯をなしている。このような状況は古代、中世、近世を通じても同様であったと思われる。水田耕作は経済的基盤の根柢をなすものであるから、古代東山道宮田駅址を諏訪形の地と説える人もいる。(註1)全般的にみると、遺跡地は北西から南東に向つてわずかに傾斜をしており、前述した低湿地を見おろす小高い面に位置しており、居館を構えるには絶好の地の利を得ていると思われる。この低湿地を形成している地形・地質的要因は南の大田切川の影響を全面的に受けているものである。このことは、文化、経済両面で、宮田を含めた南部地区の影響を大きく受けているものと思われる。

(2) 遺構について

前に述べたように城館址の発見は全く予期していなかった。予算や日程等の問題で、全面発掘は不可能であったが、一応、検出された遺構について考察的に述べてみようと思う。ここでは、あえて中世に関する遺構について、取り扱つかうこととする。住居址ではプランは隅丸方形で、その規模は4m62cm×4m70cm位であって、壁は外傾気味を呈していた。焼土の跡が発見されたので、これを窯炉裏風の遺構と考えた。柱穴のなかで、中世にみられる角状のものも認められた。

遺物は室町中期古瀬戸灰釉平茶碗、室町中期古瀬戸天目茶碗、室町後期古瀬戸鉄釉壺の破片が出土し、一般的な考え方の時代決定からすれば、室町後期の住居址と思われる。

堀址は第Ⅰ章、第2節城郭址及び堀址のところに、詳細に述べてあるので、今回ははぶくことにする。堀の形態としては、一部分では薬研堀りや、箱薬研堀りを成している。出土した陶磁器より判断してみなければ時代決定は成り得ない。第Ⅲ遺物、第1節、土器・陶磁器の時代的分類比率からして、鎌倉期に初源的な堀が構築され、室町中、後期にかけて、大規模な堀が掘られたものと推

測できると思われる。このことは前に述べたように、薬研堀りと、箱薬研堀りとがあつても不思議ではないと思われる。

溝状造構は全面的な発掘調査ができなかつたので、その規模や実態は不明であるが、検出された場所や、その状態からして、郭のなかをとりまく排水溝的な用途をもつ造構かと思われる。郭内を全面発掘したならば、このような造構は数本入つておる、その出口は掘址へと続いていると推測できよう。

井戸址は掘り込み面の基盤が砂層の堆積が多かったので、全面発掘が実施できなかつたのでおしられる。詳細な点については、前に述べてあるので、今回は省略することにする。井戸址の存在する面と、南側の自然の沢と比高差は割合に低く、水利の便からして多くの疑問点が残る。つまり、すぐ近くに水があるのに、なぜゆえに、あえて、井戸を掘ったものかが、疑問点の第一課題であると思われる。

(3) 萩蒲沢遺跡周辺の城址

この城址を考えてみると、後述しますが時代的にみて、東へ500m程度行った諏訪形の会所のすぐ北側の上にある中村の城（安岡城）と密接な関係があると考えるのが妥当な線であろう。

(i) 物見ヤ城（註2）

藤沢川の北梅沢の西、木裏原の南にある。海拔1125mの山頂部にある。この頂きに立ってみると、北は辰野から南は中川村までの上伊那が眼下に手にとるように見える位置にあり、したがって、烽火台に利用されたものと思われる。この城の東端に、狼煙のための穴が地表から20cm位下から細かい炭片が出てくる。炭片の深さによってみても、この狼煙台の古さが想像される。

(ii) 諏訪形中村の城（安岡城）（註2）

諏訪形会所のすぐ上の段丘先端部にあり、旧記によれば、中村の城東西南北共に30間、周囲に回塙あり、天文のころの居跡、由緒全く不明である。今は城もその周囲の土塁も北を残して全く平にされてしまったが、東西80m、南北はやや短く、ほとんど矩形をなしていたようであった。城のすぐ下の酒井氏宅に城中から掘り出した数ヶの茶臼、陶磁器類、土器、石器を沢山保管してある。陶磁器類には室町後期から安土桃山時代のものが多かった。平山城の一體かと思われる。

(iv) 表木城（註2）

表木部落の東側、天竜川第2段丘面に位置している。南北朝の終り頃、小笠原長秀らに従って、善光寺平で戦った（大塔合戦）が記録に残されている。この合戦には下牧、中越・沢渡の地侍達も参加している。おそらく、この城主といわれている表木大膳も参加したことと思われる。現在でも焼米が相当量出てくる。本郭部は三方深い堀にめぐらされ、その上に高い土塁が囲み、入口は西側にある。東西25間、南北30間の矩形をなしていたが、現在は電車線路のために、東半分は破壊されてしまっている。平山城と思われる。

(v) 下牧の古城（註2）

下牧部落の東側、天竜川を眼下に見おろす地点にあり、城域は約2反5畝位、南側に土塁があり、高さは3m以上もあったらしい。入口は南側にあったようで、現在は加納氏の屋敷となっている。大塔合戦にみられる下牧尾張守はこの城跡に関係した武将と思われる。平山城の一體かと思われる。

る。

(4) 出土陶磁器について

出土陶磁器については本文の報告に記してあるので、今回はその総合的な見回しを述べてみたいと思う。全体的にみて、室町中～後期が大部分であり、それに混じって、わずかに鎌倉や南北朝期のものもみられた。江戸期のものは後世の飛び込みの可能性が強いと思われる。

出土量も多く、また器種が、仏具、祭祀具、日常雑器類、貯蔵用品と多種多様であり、ある程度、城の中で定住的な生活が営まれていたものと思われる。つまり居館址的な要素が濃厚となってくる。

(5) 存在時期について

出土陶磁器からして、本城跡は鎌倉後期から室町初頭にかけて、その基礎的なものができる、室町中～後期にかけて、その全盛期を迎えると思われる。

(6) 誰れの城郭かについて

この問題はいままで述べてきた各項目を総合的に集大成して考えてみなければ、その問題究明の手掛りとはなり得ない。

(1) 工藤（小井亘）氏の問題について

工藤（小井亘）氏は平安時代の終りから鎌倉時代の初め頃に伊豆の工藤氏の分派が西春近の小出に地頭職として住みついた。小井亘氏は当初は工藤氏と名乗ったが、途中小井亘に住んだことから小井亘氏を名乗るようになってきた。小井亘氏は鎌倉幕府の有力御家人とみえて、しばしば幕府へ儀式用の兵馬を送っている。これは吾妻鏡（註3）に安貞3年（1229）正月三日五御馬、嘉禎3年（1237）正月三日／御馬、嘉禎4年（1238）年正月三日／御馬、仁治2年（1241）正月三日2御馬の項に記されている。

小井亘氏は惣領家と分家との土地境界問題で論争が起こり、その裁許を鎌倉幕府に提出した書類として、一般に呼ばれている小井亘文書（工藤文書）が5通残されている。これらの文書には小井亘二吉郷という地名が出てきて、その境界は南は藤沢川、諫訪形の一部も若干含まれていると、小井亘南郷説も考えられていた。

小井亘氏は前述した経過をたどって、室町中期には諫訪神社の系統である神氏をたよって一族は諫訪へ移っていってしまう。つまり西春近地区に於ける工藤氏（小井亘氏）の活動は平安末葉から室町中期頃と決定できよう。

従って、本城跡は出土した陶磁器の時代的数量からして、工藤氏（小井亘氏）には該当しないようと思われるとともに、小井亘氏の南の境界も藤沢川と決定され、小井亘南郷説も否定されてしまうと思われる。工藤（小井亘）氏に該当しないとすれば何氏が該当するとかいうと、地形的、距離的にみて宮田氏説が考えられる。そこで、この時点では仮説であるので、宮田氏について歴史的にひもといてみると次のようになる。

宮田氏についての出自は明らかではないが、歴史的に登場してくるのは室町初期頃とされている。宮田氏の初見は「大塔物語」や「大塔軍記」にその名をみることができる。大塔合戦は加賀見遠光（甲斐武田氏の祖）の第2子長清が小笠原氏を難ぎ、代々信濃守護となっていた。10代小笠原長秀の応永7年（1400）村上満信ら諸武士の反乱にあい、敗れた戦いである。この地は現在の長

野市篠ノ井大当であるといわれている。この戦いの兵士として宮田大和守は中越備中守らと共に、守護軍（小笠原軍）に参戦している。

結城合戦記は永享13年（1440）下野の結城氏朝（註4）が前年滅ぼされた。関東管領足利持氏の遺児、安王、泰王を擁して兵を挙げた事件についての軍記だが、この時信濃の豪族は幕府の命を受けて、信濃守護小笠原政康の指揮下で戦っている。政康は軍勢を30組に分け、交代で警備に当らせたが、この組分けの内容が「結城障番帳」で24番に「宮田殿」の名が載っている。諏訪御符札之古書には、上伊那諸氏族12氏が見え、文安3年（1446）から延徳2年（1490）の45年間での諏訪上社祭礼には、宮田源有清、宮田大知守有満、宮田松夜叉、宮田有信等が記されている。武田信玄が上杉氏と川中島で戦っている時に、伊那の一部の武士が武田氏に叛し、木曾氏を討つべく木曾に入った事件が起った。弘治2年（1556）7月、伊那の溝口、松島、黒河内、上郷、小田切、伊那郡、宮田、駿島の諸氏が木曾氏と戦った。信玄、大いに怒り、諸氏を孤島に於いて謀殺したという。（いわゆる八人塚伝説）（註5）一説にはこの刑場を長谷村の溝口と言う人もいる。このように宮田氏は文献では応永7年（1400）から弘治2年（1556）に及んでいることがわかる。以上からして宮田氏は室町初期から戦国時代にわたって活躍していたことがわかる。これは前述した存続時期とぴたりと一致すると思われる。

現在、小田切氏の館址は宮田村南割にあり、宮田氏の居城は宮田村北割にある城山と考えられているが、その規模が小さく、しかも山頂という場所からして宮田氏だけの勢力をもっていた氏族にしては貧弱でありすぎる。よって宮田氏の居城として決めるには不充分であると思われる。

むしろ、宮田氏の居城は諏訪形に存在する今回発掘した城館址、安岡城に委だねるところが多いのではないか、宮田氏とは言いきれないにしても、同氏に關係する有力豪族の居館址と考えても不思議ではないと思われる。

最後に、報告書作製にあたって、地元の歴史について助言を下さった酒井清氏、陶磁器の鑑定をして下さった瀬戸市歴史民俗資料館長宮石宗広氏、現場に何度も来訪され、適切な助言を下さった伊那市史編纂室、小池正巳氏、北原真人氏、荻原貞利氏、赤羽篤氏、宮田村教育委員長向山雅重氏の名前に対して、心より感謝を致す次第であります。

（飯塚政美）

第Ⅳ章　まとめ

参考文献

- 註1 上伊那誌（歴史篇 第2編古代）
- 註2 篠田徳登（伊那の古城）
- 註3 吉川弘文館 国史大系（吾妻鏡）
- 市村成人 建武中興を中心とした信濃勘王史攷（上・下巻）
- 中村元恒 萩原拾葉（名著出版 上・中・下巻）
- 新編伊那史料叢書（歴史図書社）
- 註4 長野県中央道埋蔵文化財、包蔵地発掘調査報告書（宮田地区）积迦堂遺跡 日本道路公団名古屋支社 長野県教育委員会 昭和48年度
- 註5 甲陽軍艦

図 版



遺跡地を西側より眺む



遺跡地を南東より眺む



第1号住居址



第2号住居址及び第1号溝状遺構



堰 址



堰 址

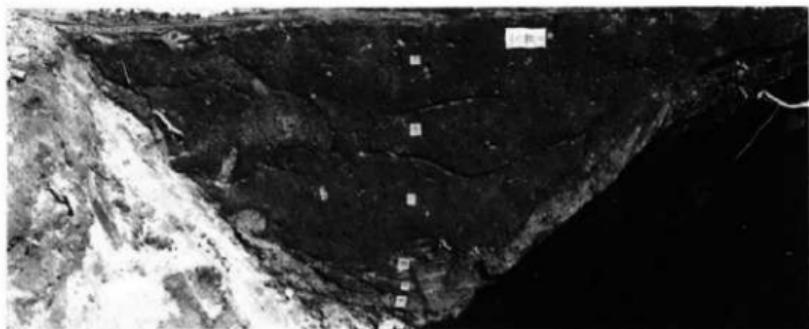
図版4
遺構



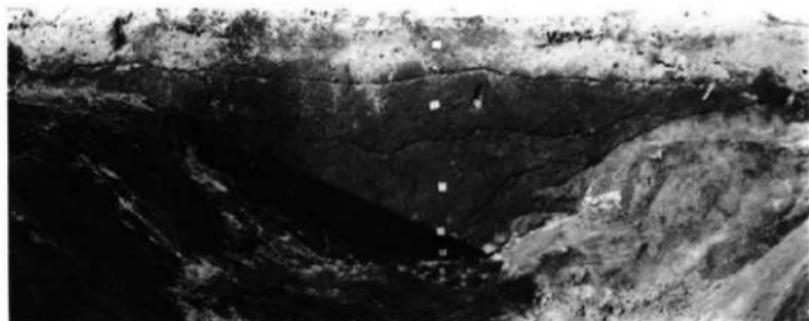
堤 壁



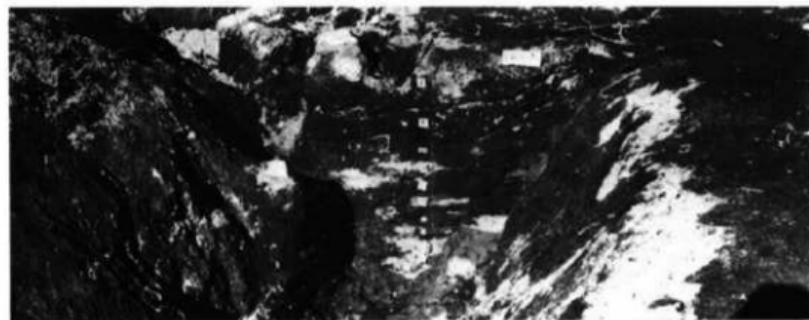
堤壁の断面



塚址の断面



塚址の断面



塚址の断面



堤の入口附近



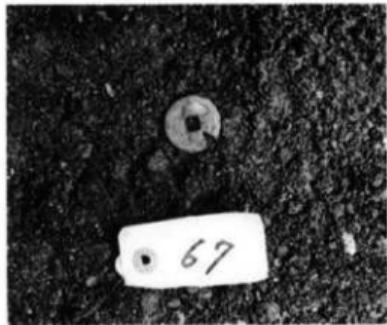
堤の入口附近



井戸址の上面



内堤の南側段丘崖へ抜け出る所



古錢出土狀況



內耳土器出土狀況



陶器出土狀況



陶器出土狀況



陶器出土狀況



須惠器出土狀況

圖 9 出土陶器



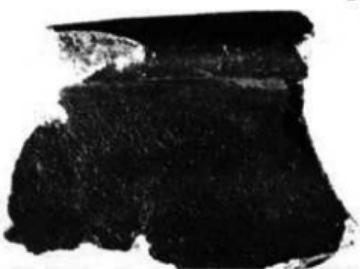
1



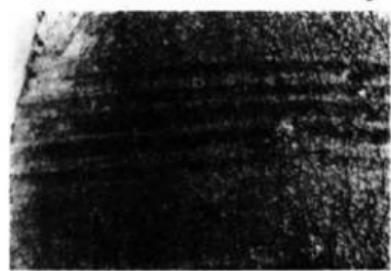
2



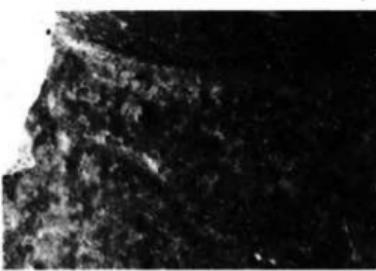
3



4



5



6



7

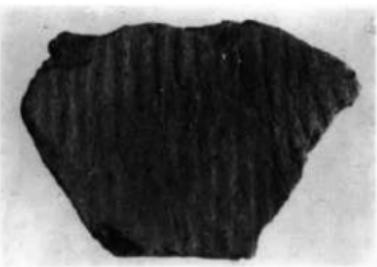


8

圖版 10
出土陶磁器



9



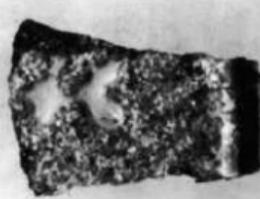
10



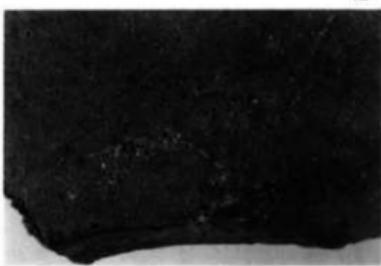
11



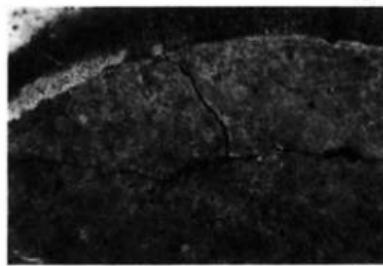
12



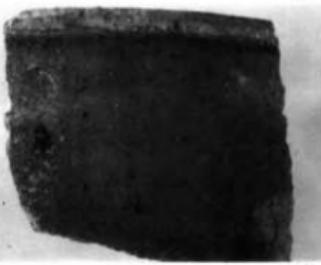
13



14



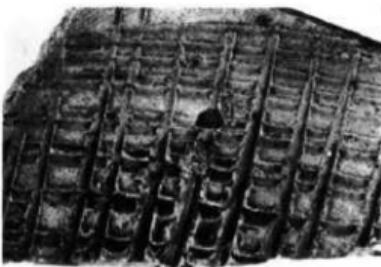
15



16



17



18



19



20



21



22



外 面

23

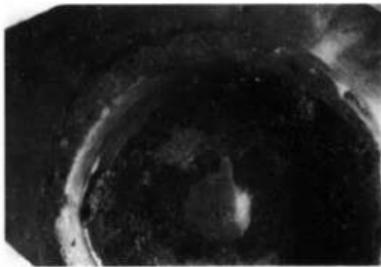


内 面

24



25



外面(底部)

26

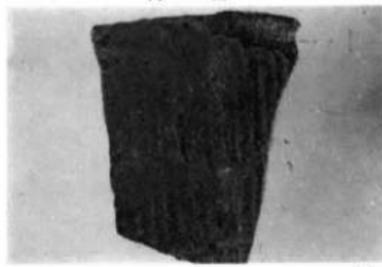


内 面

27



28



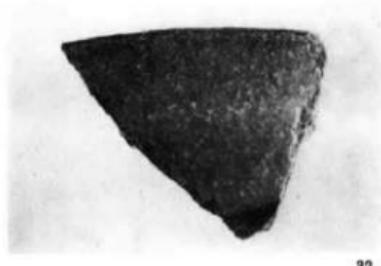
29



30



31



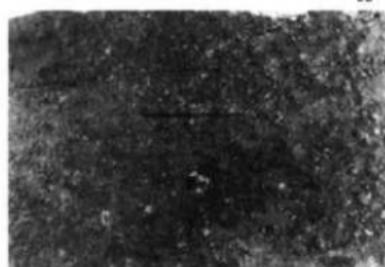
32



33



34



35



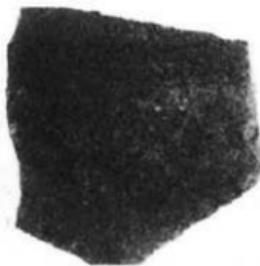
36



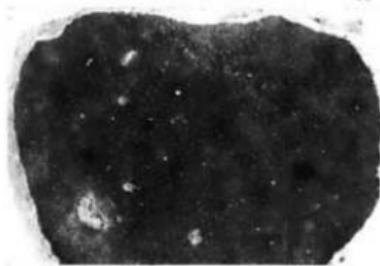
37



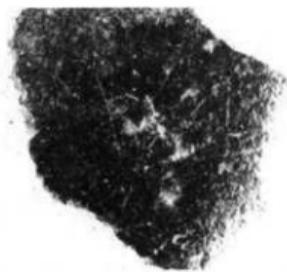
38



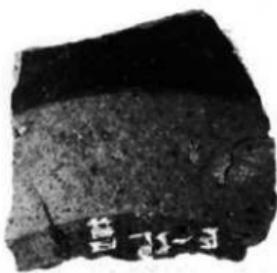
39



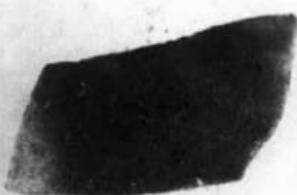
40



41



42



43



44



45



46



47



48

山の下遺跡

目 次

| | |
|--------------------|-------------|
| 目 次..... | (1) |
| 挿図目次..... | (2) |
| 図版目次..... | (2) |
| | |
| 第 I 章 発掘調査の経過..... | (3 ~ 4) |
| | |
| 第 1 節 発掘調査の経緯..... | (3) |
| 第 2 節 調査の組織..... | (3 ~ 4) |
| 第 3 節 調査日誌..... | (4) |
| | |
| 第 II 章 造 構..... | (5 ~ 9) |
| 第 1 節 住居址..... | (6 ~ 9) |
| | |
| 第 III 章 造 物..... | (10 ~ 11) |
| 第 1 節 土 器..... | (10) |
| 第 2 節 石 器..... | (11) |
| | |
| 第 IV 章 まとめ..... | (12) |

挿図目次

| | |
|-----------------|--------|
| 第1図 地形及び遺構配置図 | (5) |
| 第2図 第1号住居址実測図 | (6) |
| 第3図 第2・3号住居址実測図 | (7) |
| 第4図 第4号住居址実測図 | (9) |
| 第5図 第5号住居址実測図 | (9) |
| 第6図 土器実測図 | (10) |
| 第7図 石器実測図 | (11) |

図版目次

| |
|----------------|
| 図版1 遺跡全景 |
| 図版2 遺構 |
| 図版3 遺構 |
| 図版4 遺構及び遺物出土状況 |
| 図版5 出土遺物 |

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

西春近地区の西部開発事業（県営畑地帯総合土地改良事業）は昭和48年度の上島、東方部落、昭和49年度の東方、村岡、城、山本部落にわたって行われてきました。昭和51年度は沢渡の上段（眼子田原）地区が該当しました。昭和52年度は南小出、宮の原、中村部落にかけて行われました。昭和53年度は柳沢地区と白沢、南小出地区が該当し、昭和54年度は諏訪形の菖蒲沢遺跡、山の下遺跡の2遺跡が該当しました。

発掘着手以前に南信土地改良事務所より委託する旨が伊那市教育委員会へ通知されました。市教育委員会では、その件について承諾しましたので、市教育委員会を中心に、山の下遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を行うことにしました。

南信土地改良事務所長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。

第2節 調査の組織

山の下遺跡発掘調査会

調査委員会

| | | |
|-------|-------|----------------|
| 委員長 | 伊沢 一雄 | 伊那市教育委員会教育長 |
| 副委員長 | 福沢總一郎 | 伊那市文化財審議委員会委員長 |
| 委員 | 赤羽 眞士 | 伊那市教育委員長 |
| ◆ | 向山 伸雄 | 南信土地改良事務所長 |
| 調査事務局 | 北村 忠直 | 伊那市教育委員会前教育次長 |
| ◆ | 三沢 昭吾 | ◆ 教育次長 |
| ◆ | 石倉 俊彦 | ◆ 社会教育課長 |
| ◆ | 有賀 武 | ◆ 課長補佐 |
| ◆ | 米山 博章 | ◆ ◆ 前係長 |
| ◆ | 武田 則昭 | ◆ ◆ 係長 |
| 調査事務局 | 沖村喜久江 | ◆ ◆ 主事 |

発掘調査団

| | | |
|-----|-------|-----------|
| 団長 | 友野 良一 | 日本考古学协会会员 |
| 副団長 | 根津 清志 | 長野県考古学会会員 |
| ◆ | 御子柴泰正 | ◆ |
| 調査員 | 飯塚 政美 | ◆ |
| ◆ | 福沢 幸一 | ◆ |

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

| | | |
|-----|------|-------------|
| 調査員 | 田畠辰雄 | 長野県考古学会会員 |
| タ | 小木曾清 | 宮田村考古学友の会会長 |
| タ | 春日徳明 | 大正大学学生 |

第3節 発掘日誌

昭和54年12月10日 本日より山の下遺跡へ坪り的にグリットを入れて、その遺構及び遺物の集中地区をしづらるようにした。山の下遺跡は菖蒲沢遺跡から徒歩で約10分程の場所にあり、全面に桑畑となっていた。テントを運搬するには時間を費やすので、発掘器材だけを運ぶことにした。

昭和54年12月11日 グリット掘りを進めていくと、遺構の検出があり、これを第1号住居址と命名する。そのプラン確認を夕方までかかって行う。プラン確認には住居址附近では耕土が浅く30cm位だったので思ったより時間的に早くできた。

昭和54年12月12日 第1号住居址の北側を拡張していくと、第2号住居址がみつかり、さらにその東側に第3号住居址が発見され、その東側に、第4号住居址が発見された。午前中一杯かかって、そのほぼ全ぼうをつかむ。それによると、北から南にかけて住居址を切るようにして、川が流れている。さらに南西の位置に黒色土の床面を持つ住居址が発見された。一日中かかって、ほぼその住居址の全ぼうをつかんだ。

昭和54年12月13日 第1号住居址の清掃及び写真撮影を終了する。第1号住居址から第5号住居址の平面及び断面実測を終了する。全測図の作製を行う。

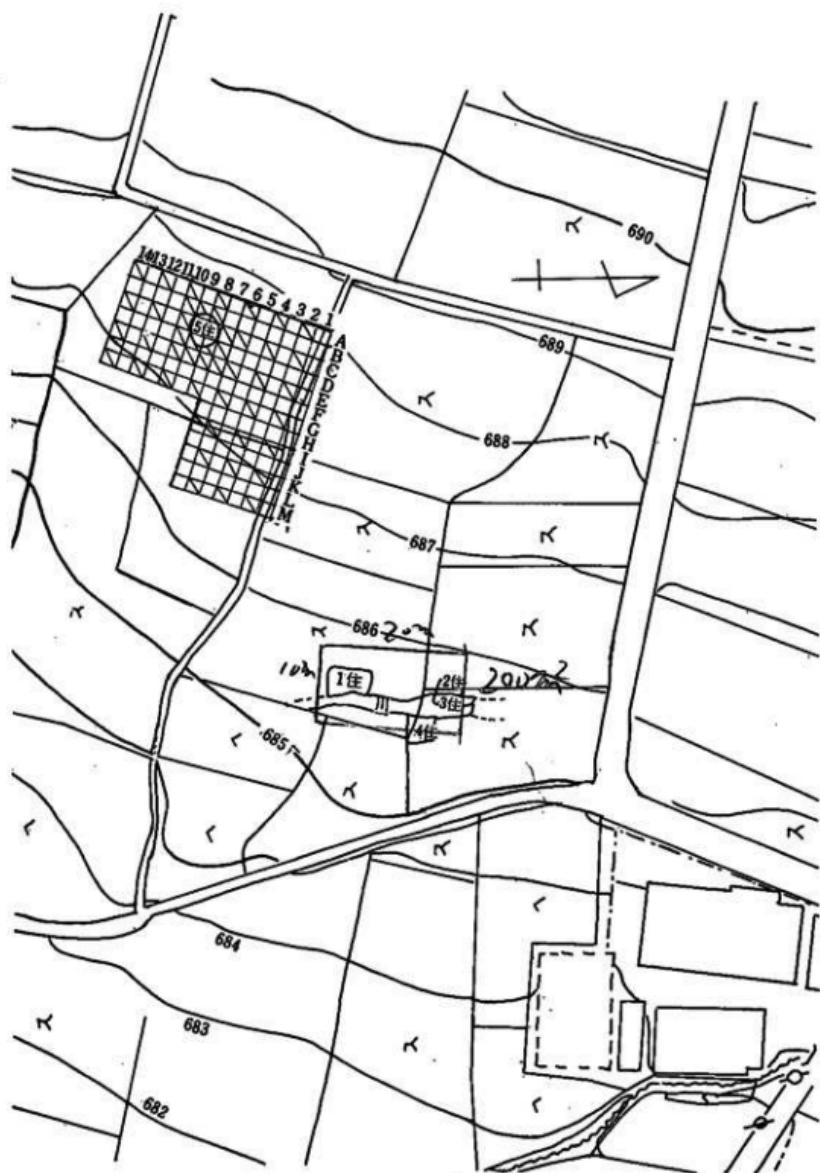
昭和54年12月28日～昭和55年1月10日 発掘調査の終了した後の整理を行なう。

昭和55年1月～2月 遺物の整理、図版の作製、報告書の原稿執筆、編集、報告書を印刷所へ送る。

昭和55年3月 報告書の刊行 (飯塚政美)



発掘風景



第1図 地形及び建構配置図 (1:750)

第Ⅱ章 遺構

第1節 住居址

第1号住居址（第2図、図版2）

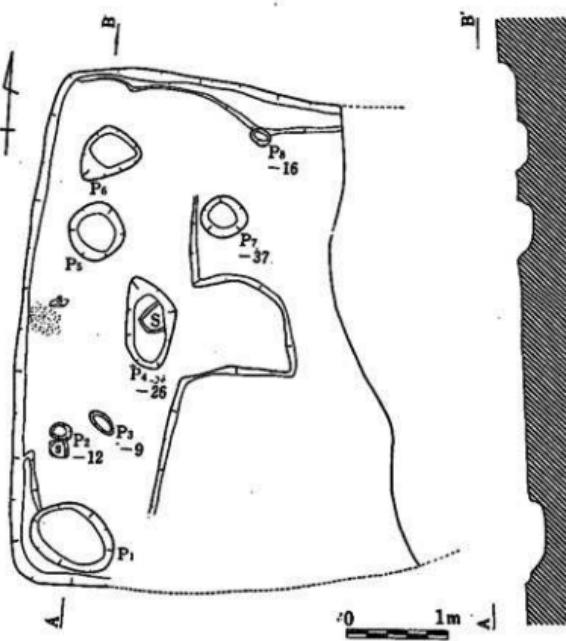
本址は住居址群中で、最も南側の位置に発見され、東側は川によって破壊されてはいるが全般的には、隅丸方形プランを呈する竪穴住居址である。規模は南北5m10cm、東西は（東側は川によって破壊されている為に不明である）

壁は西側では垂直に近く、凹凸が多い、北壁は内湾気味で凹凸が少ない。南壁は掘り込み面が浅かったために耕作時に大部分破壊されてしまったものと思われる。床面はローム層中に構築され、かたくなつておらず、凹凸が多い。同面上の北壁直下に周溝が回っていた。カマドは西壁中央部附近にあったと思われるが、現在はその残がいである焼土がわずかにあり、構築当時のカマドの存在を留めていた。

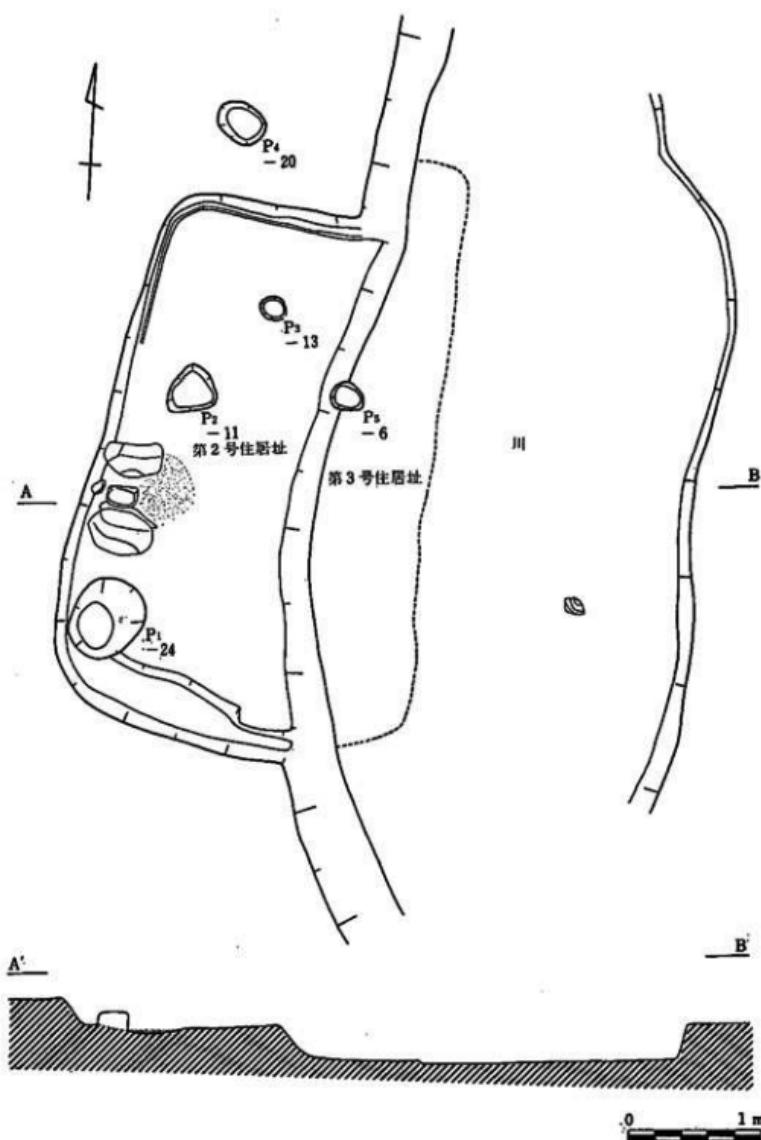
柱穴は全体が不明なので、その配置はわからないが、推定するに4本主柱穴と思われ、それに該当するのはP₁、P₂であろう。遺物は土師器、須恵器が出土している。したがって、本址は奈良時代の住居址と思われる。

第2号住居址（第3図）

本址は住居址群中最も西側の位置に発見され、表土面より30cm位下ったローム層面を掘り込み、隅丸方形プランを呈する竪穴住居址である。規模は南北4m3cm、東西は東側は第3号住居址に切られている。壁高は西で20cmで、外傾気味、ややかたく凹凸は著しい。北壁は20cm内外を計り、垂



第2図 第1号住居址実測図



第3図 第2・3号住居址実測図

直に近く、壁面はややかたい。

床面はローム層面につくられ、かたく、凹凸は著しい。同面上には北壁から西壁の北半分に幅の狭い周溝が、南壁には幅広の周溝が回っていた。

柱穴は全体的なものがつかめないが、主柱穴となり得るものはP₁、P₂であろう。カマドは西壁の中央部よりやや南寄りに位置し、石組粘土カマドで、保存状態は良好であった。焼土は焚口附近一帯に集中して検出された。

遺物は土師器、須恵器が出土した。したがって本址は奈良時代の住居址と思われる。

第3号住居址（第3図、図版2）

本址は西側で第2号住居址を切るようなかっこで発見されたが、大部分は東側の川によって破壊されてしまっていた。ただ、西側の一部分に、床面らしき、かたいところがあったので住居址と考えた。遺物の出土は何もなかったが、切り合ひ関係より第2号住居址よりも新しいことは明白である。住居址の実態はほとんどといっていい程で不明である。

第4号住居址（第4図、図版3）

本址は住居址群中、最も東側に、また第2・3号住居址に近接して発見され、表土面より50cm位下ったローム層を掘り込んで構築してある。規模は南北3m43cm、東西3m70cm位の広がりを有し、平面プランは隅丸方形を呈する竪穴住居址である。

壁は西側の一部分で川によって切られている。高さは全般的に浅い。状態は西は外傾気味、凹凸が多い。北壁は垂直気味、凹凸が多い。東壁は内湾気味、凹凸は少ない。床面はかたくしまっており、ブロック状に凹凸が多い。柱穴は後世の耕作による搅乱のために不明な点が多い。

カマドは西壁中心部よりやや北側にあったところにあったと思われる。構築当時は石組粘土カマドであったと思われるが、現在は大部分、こわされてしまって、わずかに粘土と焼土が残っているに過ぎない。遺物は土師器・須恵器が出土した。よって、本址は奈良時代に属していると思われる。

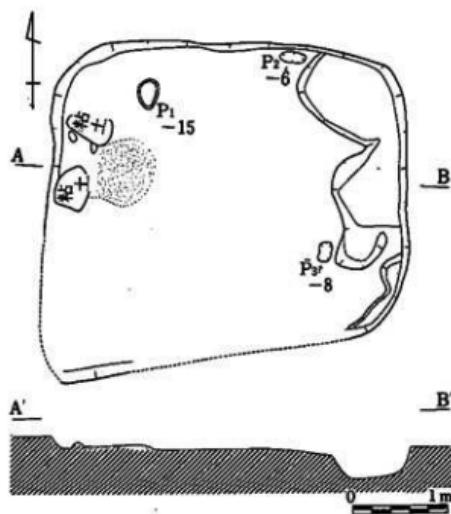
第5号住居址（第5図、図版3）

本址は住居址群中より南西へやや離れた位置に検出され、表土面より60cm位下った黒色土層面を掘り込んで構築してある竪穴住居址である。南北4m50cm、東西4m55cmの規模を持ち、平面プランは円形形状を呈している。

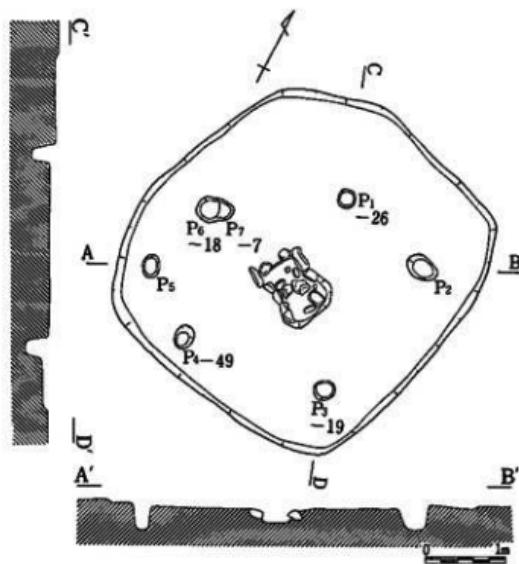
壁高は数cmと浅く、軟弱であった。床面は黒色土でかたくなっており、大般水平であった。炉は住居址の中央部附近にあり、南北80cm、東西90cm程の方形石窯炉で、石はこぶし大程と、炉石としては小さい方であった。

柱穴は全部で7本発見され、全て、主柱穴となりそうである。大きさ、及び炉からして縄文中期後葉の住居址と思われる。遺物は打製石斧が出土している。

（飯塚政美）



第4図 第4号住居址実測図



第5図 第5号住居址実測図

第Ⅲ章 遺物

第1節 土器

第6図の1は第1号住居址出土の土師器甕の底部である。底部は内外面ともにハケ仕上である。焼成は良好であり、胎土中には長石と雲母が少量混入している。色調は褐色土を呈している。

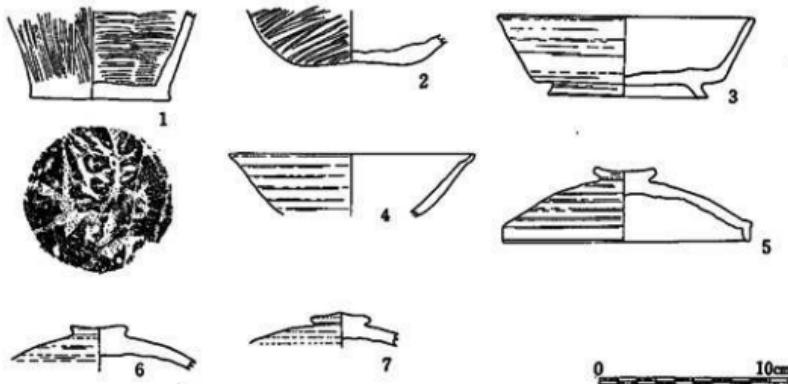
第6図の2は第2号住居址出土の土師器甕の底部である。外部はクシ目文様である。焼成は普通で、黒褐色を呈し、胎土中に長石を混入している。

(3)は第1号住居址出土の高台付須恵器碗である。焼成は良好であり、胎土中に長石粒を混入している。色調は黒色に近い暗褐色を呈している。

(4)は第4号住居址カマド出土の須恵器の杯である。焼成は良好であり、胎土中に長石を微量に含んでいる。色調は暗褐色黒に近いネズミ色を呈している。

(5～7)は全て須恵器の蓋である。(5)は第2号住居址床面出土、(6)は第1号住居址出土、(7)は第1号住居址出土である。(5)はロクロ仕上で、つまみの頂部は若干へこんでいる。内面の一部分に炭化物が附着していた。焼成は良好であり、胎土中に長石混入、色調はねずみ色や、やや黒味を呈する。(6)はロクロ仕上で、つまみは頂部はほぼ(5)と同じである。焼成は良好、胎土中にわずかに雲母を含んでいる。

(7)はロクロ仕上で、つまみの頂部はややとんがっている。焼成は良好、胎土中に雲母を混入している。



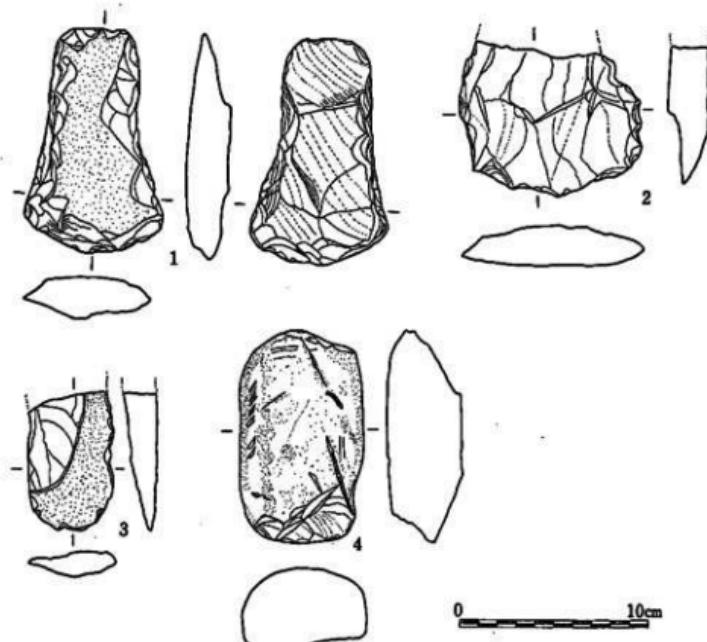
第6図 土器実測図

第2節 石 器 (第11図)

今回の発掘で出土した石器の総数は全部で4点である。(1~3)は打製石斧である。(1)はグリット内、(2)は第5号住居址の炉内、(3)は第3号住居址の床面よりそれぞれ出土している。石質は(1~2)では綠泥岩、(3)は硬砂岩である。石斧の形態としては(1)は盤形、(2)は上部欠損で全体は不明であるが、現存している部分から推定して盤形と思われる。(3)は上部は欠損しているが、短円形と思われる。(1~2)は剝離の調整は丁寧であるのに対し、(3)はあまり剝離は良くなくて、大部分自然面を残している。重量は(1)では250g、(2)では190g、(3)は65gを測る。

(4)はグリット内より出土した硬砂岩製の敲打器であり、表面にはところどころに磨いた跡や使用痕が認められる。打痕のみられる部分は上部と下部である。石器は全て縄文中期の時期と思われる。縄文中期の住居址の検出が、わずかに一軒だったことを物語るように石器の出土量も少なかった。

(飯塚政美)



第7図 石器実測図

第Ⅳ章 まとめ

山の下遺跡は、縄文時代から奈良時代にかけての生活のあったと推定できる遺跡である。今回の発掘地区は、遺跡地のうちでも西の山麓近くによった方で、すぐ近くを中央高速道路が横切っている。

住居址は全部で5軒発見され、その時代別内訳は縄文中期の竪穴住居址1軒、奈良時代の竪穴住居址4軒であった。第1～第4号住居址は奈良時代で大般一ヵ所に集中し、第5号住居址は縄文中期で、単独に一軒だけ発見されるような状態であった。第1～4号住居址は集中した状態で検出された結果切り合い関係もやや複雑であった。第1号住居址の東側は後世の川によって切られ、第2号住居址は東側で第3号住居址に切られ、第3号住居址は東側第1号住居址同様のような状態であった。平面プランは第1～4号住居址は隅丸方形、第5号住居址は円形状を成していた。

住居址内の施設としては第1～4号住居址はカマドの存在をみとめることができたが、保存状態の良好なのは第2号住居址だけで、他は大部分破壊されて、わずかに焼土や粘土が残存していることからして、カマドの存在を推測するに過ぎない。第5号住居址は方形の石圍炉であった。

遺物の出土はわずかな量であった。土器器類は文様や器型より真間期に、須恵器も同様な時期に属していると思われる。ただ、灰釉陶器片が1片も出土しなかった点に注目してもよかろう。

第5号住居址のなかからは土器片が一片も出土しなかった。これは時期的にみて、当然多量の遺物の出土があつてあたりまえであるのに、先のような結果であったことは何か不思議な感がする。

石器の出土は全部で4点だけの出土であったが、これは縄文中期に住居址の検出が一軒だった事実を物語っている。それにしても、土器同様、時期的にみて、もう少し、多量に出土してもおかしくはないと思われる。

最後に、発掘調査に適切な指導をして下さった長野県教育委員会文化課職員一同、現場の交渉に手助けいただいた南信土地改良事務所職員一同、調査団の諸先生、地元作業員の皆様に厚く御礼申し上げる次第であります。

（飯塚政美）

図 版



遺跡地を南側より眺む



遺跡地を東側より眺む



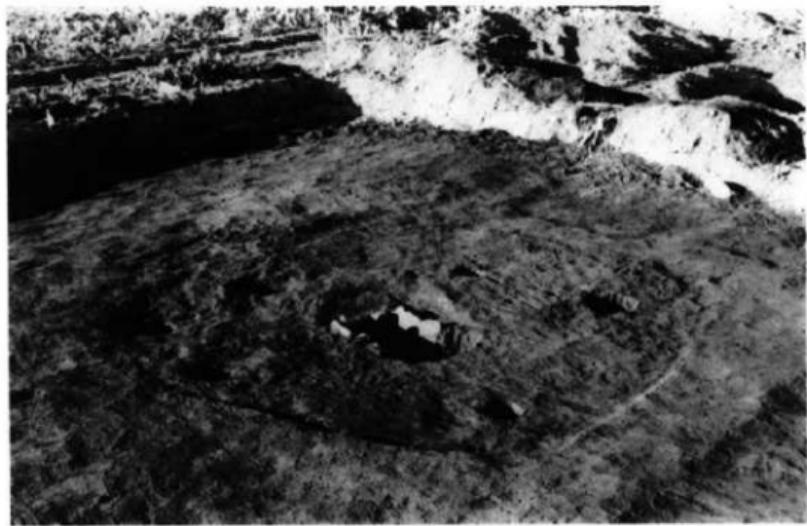
第 1 号住居址



第 2 · 3 号住居址



第 4 号住居址



第 5 号住居址



第2号住居址カマド



第5号住居址炉址



土器出土状況



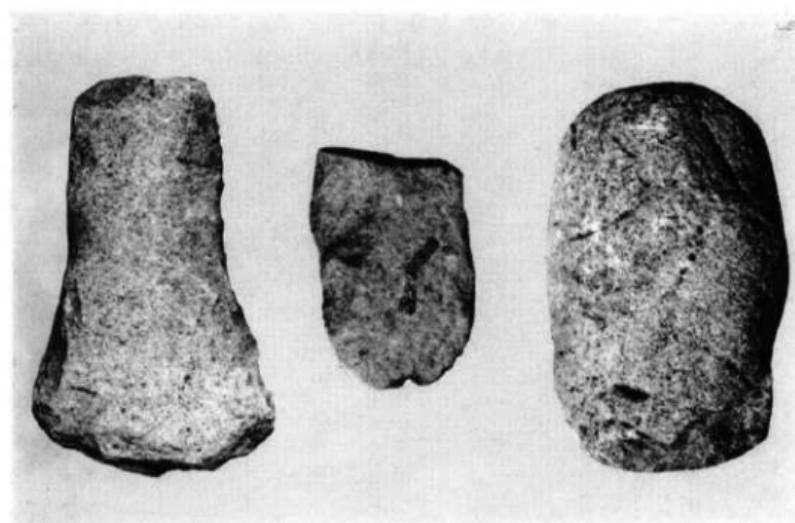
土器出土状況



土器出土状況



土器出土状況



出土石器



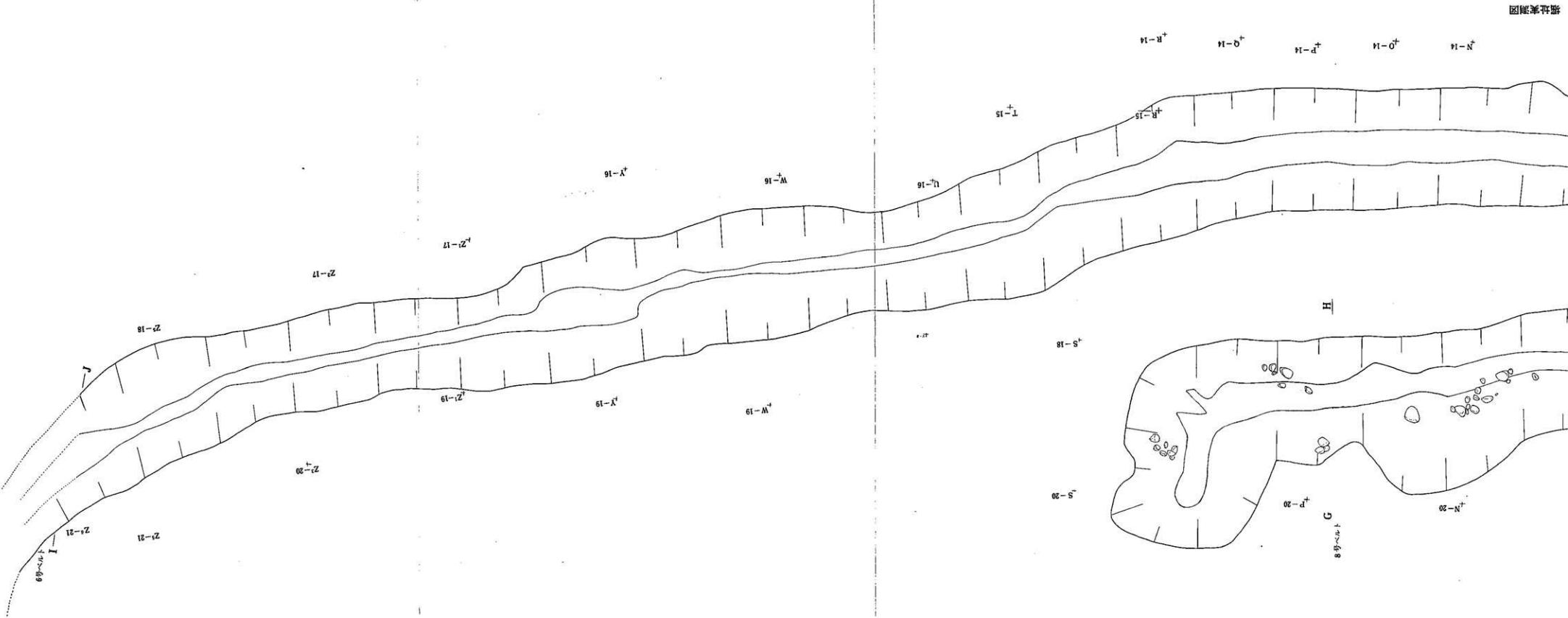
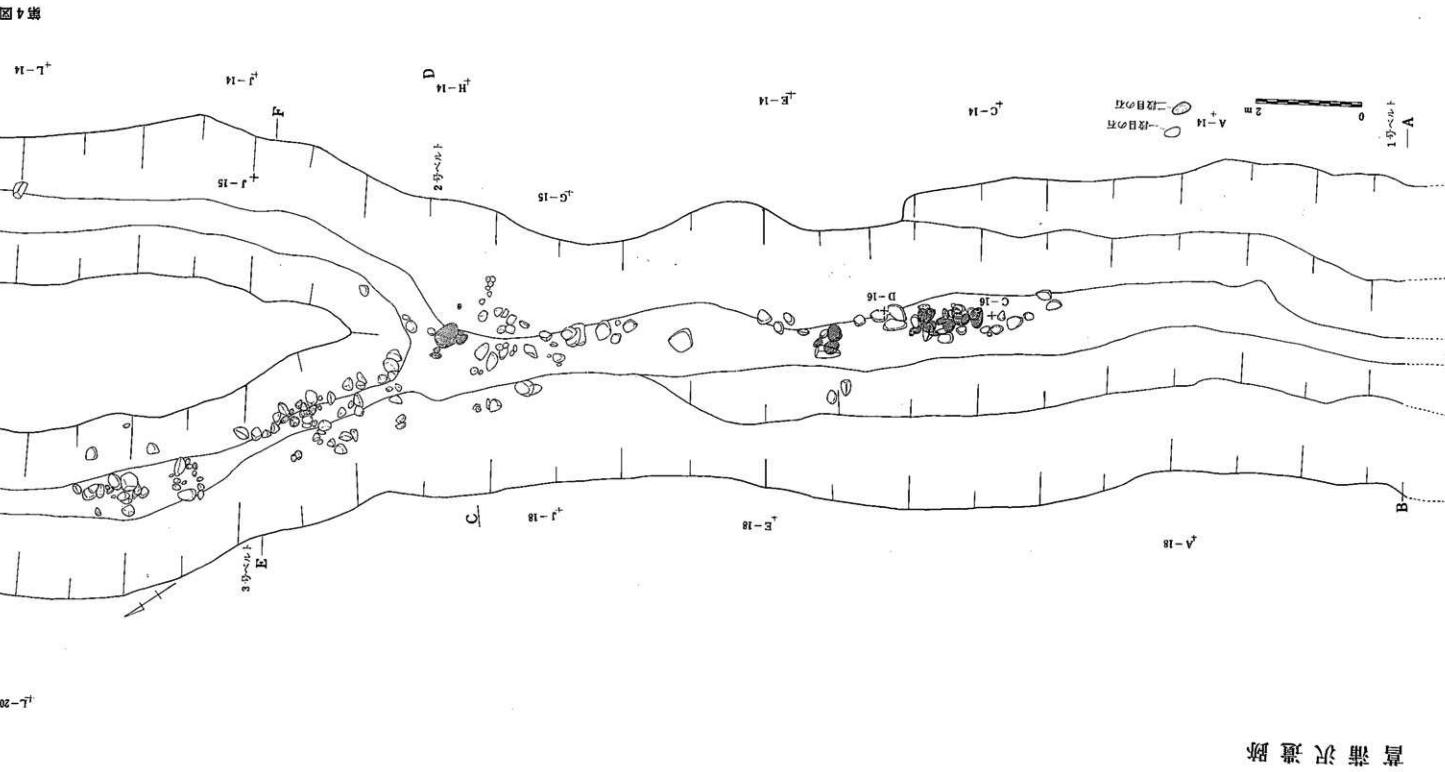
須惠器



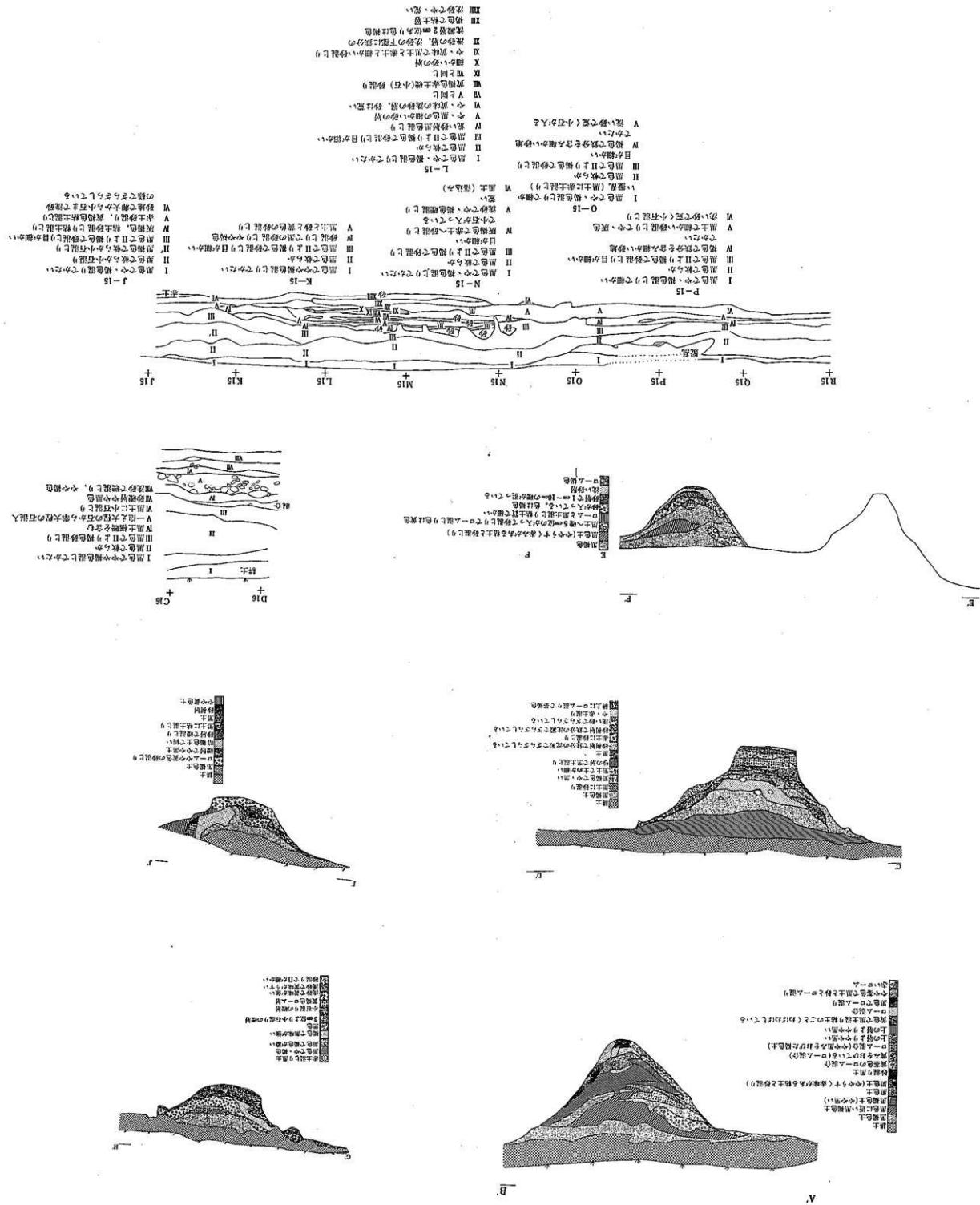
須惠器

算
漸
次
遺
跡

第4圖71



第4図の2 滅却里町 (鹿児島県) 地質構造図 (地質構造図と地質断面図)



菖蒲沢・山の下遺跡

一緊急発掘調査報告一

昭和55年3月15日印刷

昭和55年3月17日発行

発行所 長野県伊那市教育委員会

印刷所 長野県長野市西和田470

信毎書籍印刷株式会社
